明治三十七年五月七日第三種郵便物認可
大正十年五月一日發行（毎月一回一日發行）

THE Y.W.C.A. MONTHLY

女子青年界

女子青年界第十八卷五月號

五月號

Y.W.C.A

要目

日本基督教女子青年會發行

第十八卷 第五號

女子青年界目次

大正十年 五月號

▲會　説▼

◆其實驗說明書の發行十三版を重ぬ◆

本器は會主前島震太郎の創製にして江湖に提供して以來七箇年

酸素療器



▽邦文 支那文 治病實驗例附說明書贈呈△

オキシヘーラー

▼オキシヘーラーの効力顯著なる事は使用僅か五分間にして三乃至五m.mの血壓を亢め一時間を繼續せば實に十乃至三十m.mの活力を增進す試に血壓計、脈波計を以て驗せば其調節の狀を明にし各自は脈搏呼吸、體溫の整調に依て自覺せらる

▼靈妙なる磁氣應用の本器は斯して血液中の酸素吸引力を增大し健康の元素を補ふが故に難治の疾病を根治するに空前の偉力を有す論より證據使用者は忽ち脈搏强實となり全身の溫暖、呼吸の深長を感じ次で熟睡、解熱、鎭痛、食慾の亢進、兩便の快通等生理的本能を回復するの神速なるは實に天下の奇蹟なり

特色（使用法簡易効力永遠不滅にして電池の如く消耗するものにあらざれば器械購入以外永遠に何等費用を要せず

■正價金參拾五圓■

送料 內地金參拾六錢 支・朝・臺・樺金六拾五錢

東京市牛込區神樂町一丁目一番地

◇オキシヘーラー奬勵會◇

電話番町局三〇七・四六八九・振替東京二七一二

愛用者實に數萬を算して信用愈ゝ確立決して他の模倣を許さず

星

五月號

發行所 大府下南河內郡柏原村大字市村三一六山澤方 星發行所
價一册拾錢 送料二錢



女子青年界 第十八巻五月號 大正十年五月一日發行

會説

假装の姿

河井道子

花見時節になると、様々の假装者が得意で馬鹿げた眞似をして、得々然と活歩する姿は、可笑もあり眉を顰む事もあります。何故でしよう。所謂なつてゐないからであります。卽ち男が女の服装をして、妙な聲色を使つたり、中には女頭男軀や、人面獸身の姿や、法被の上に袈裟、衣は滑稽の時もあり嫌氣のさす時もあります。各自に不適當な外形や、不自然な眞似事は何に依らず此假装的なることを示して居るので、是を内的に考へて見ると、反省すべき事が澤山にあります。

又小供を見るに彼等の大好なことの一は、大人の下駄を穿きたがる事です。自分には大き過ぎ且不便で、轉べば怪我でもしかねまじきものが、却て面白くてなりません。紐育市に妙な風俗があります。其は十一月末の感謝日に、子供達が、大人の服装をして辻々を歩き廻る事です。其由來は知りませんが、決して結構な風俗ではありませんから、近き中に禁止されましよう。尤も此等は下層の家庭にある兒童で一般の事でないのは、日本の花見時節に假装を樂む人々が、一部の社會と限られてゐると同様です。

一體何故這麼ことが、可笑しかつたり、嫌氣がするかと申せば、前述の通りなつてゐないからであり

ます、其意味は、不自然的との事であります。子供等のは可笑い部に屬し、大人等のは嫌氣の部に入りましよう。單に服裝のみならず、子供が大人の樣な言葉を使ひますと、可愛らしい所が失くなつて、いやになる事もあります。其かと云ふて又八九歳にも成つた子が、赤坊の樣な言葉を使ふと、甘へたとて叱られます。此と同樣に、私共も自分の考へた事でもないことを自分が、思付いた樣に、半分しか理解せぬことを、全々理解した樣な風をしたり、出來もしない事でも出來る樣子をし、無いものを有る樣に見せかけるのは是れ全く精神的の假裝であります。

殊に近頃は有名無名の著者の說を我物として、ドシドシ得手勝手な說を吐き、其で滿足してゐる或は自慢をしてゐる若い男女が多いのは甚だ悲むべき事であります。元より青年の時は先輩の思想に親しみ其卓說を敬聽すべきもので、そうして居る中に追々其思想や學說が心に染込んで、自分の思想ともなり理想ともなるので、何も聽かず、讀まず、習はずして、立派な考は出るものでない事は誰でもよく知つて居ります。注意すべきは知るを知り、知らぬを知らぬとすることです。出來るは出來る、出來ぬは出來ぬで、自然的に、謙遜的に、正直に考へて、行ふ事が肝要です。然でなくば決して人格は向上いたしません。キリストが是々否々といへ此より過ぐるは惡より出るなりと云はれたのは何たる深い眞理でしよう。私共に此精神があれば、宗敎も學問も交際も日常生活も一掃されて新しい光に輝されます。

舊約書の物語に面白い節々が澤山あります。今私の申して居る事柄にあてはまるのを引照しますと、サウル王が若い牧羊者のダビデに自身の鎧兜を被せて、巨人の强敵ゴリアテに搦ませたる物語で、幾度讀んでも愉快でなりません。サウルは巨人でしかも軍人ですが、ダビデは小形な青年牧者ですから、後者には王の軍服は大きすぎ、重すぎ却て苦しくて役に立ちませんし、劍を佩びたことのない青年は、劍を持つては働けないのです。そこでダビデは假りた

軍服は脱ぎすて、劍は御免蒙むるとて辭退して、平常から持ちつけてゐる牧者の杖をとり、五の石をよく吟味して拾ひ牧羊者の具なる袋に入れ手に投石索を執つて、敵軍の大將に向つたのです。かくして彼は敵を敗かしたとあります。(サムエル前書十七章參照)

ダビデは假裝は嫌でした、自分は自分に適當したものを神から戴てゐるから、其を充分に發揮して活用せんと努力したのです。其故に彼は終身祝福を得て、勇より勇に、德より德に進みました。私共も已に適應したるもの、物質といはず精神的といはず、神から御覽になつて、丁度よろしいと云ふものを與へ給ふのですから、其を活用させてをる中には、益々豐富になるのです。然るに何か偉らそうな事を言はねと不可などゝ思ひ間違ひ、六敷そうな議論じみた、理窟をこねたり、己の不德を被ふために、何々先生はかく申される、西洋の何學者の說はかくあるなどゝ、其を引用するは子供が大人の下駄を穿く以上に可笑しく又危險であります。或時は家が貧い處よりして衣服が欲しくても買へない時や、又妙な虛榮にかられて友人の衣服の假着をして誇る事が益々其若き女學生を惡德の婦人に增長させたことなどは例の多いものです。是等も皆ないのに、あるふりをしたがつたのが原因であります。私共は無ければ其で不自由を我慢し、不足を訴へずして行く中には、物質上に於ても惠まれます。其故に、何によらず不自然な無理な事はさけて、正直と、謙遜と、努力とを以て、進むやういたさば、ダビデが小石で大敵に勝ち得た如き、大經驗を體得する日が參りませう。

× × × × × × × ×

ダンテ神曲の宗教的教訓

石原謙

ダンテは一二六五年イタリーのフロレンスに生れた。彼の幼時に就ては歴史の記す所詳でない。唯彼の家の名家でありし事、九歳の時始めてヴィアトリスを知るに至りし事等が彼の生涯の記録の第一である。今日でこそダンテの名聲は世界的であるが、彼の五十五年の生活は實に慘めなものであつた。種々の政治的鬪爭から終に國を追はれ、生涯故郷フロレンスにさへ歸る事を許されなかつたのである。故に外形的に云へば彼の生涯程悲慘な涙にみちたものはなからう。然し此苦痛は彼の精神的發達に關しては決して無意味ではあり得なかつた。同時にヴィアトリスに對する滿されざる愛も彼の內的發達に大いなる影響を及ぼしたのである。

ヴィアトリスには九歳の時初めて相逢ふて後、九年後二度フロレンスの町をダンテが歩いて居た時出遭つた事があつた。其後も友の婚延の席などで一二度相見たのみであつたが、彼の愛は年を經るに從ひ愈々高まり行くのであつた。然しヴィアトリスは之を知りてか或は知らずしてか、他の人に嫁ぎ行いたのである。其後僅三、四年にして彼女は廿五歳を一期として世を去つて終ふ。彼女の死が彼にもたらした悲しみは「新生」といふ詩集中に彼自ら歌つて居

る。其はフロレンスの町を荒野と化せしめたのみでなく、彼の中から一切の希望をも光をも奪ひ去り、彼をして如何に世を過すべきかをさへ辨へしめぬに至つたのである。此時種々の誘惑が彼の周圍に現れ彼は終に道ならぬ方にすべり落ちて了ふ。神曲の序曲に彼は此時の惨めな心の有様を歌つて居る。

今日我等をしてダンテに興味を感ぜしむるものは彼の外部生活を悲惨ならしめた政治的生涯ではない。それは、彼の愛が此地上に滿されざりし時、彼は如何に其を高め深め強めて、終に種々の苦痛と誘惑との中より彼を全く救ひ出す力と化せしかにある。ヴイアトリスに對する彼の愛は、終に彼をして神曲を作らしめた。而して之は實に彼の内部生活の記錄である。我等は之により最も近く彼ダンテに近づく事が出來るのである。

神曲は、地獄、練獄、天國の三部より成り、各部三十三の歌を有して居る。但地獄篇には全體の序ともいふべき一の歌が加へられて居るから卅四ある。都合全部で百の歌をなして居るのである。全體の主意は前述の如くダンテの心の姿、卽ち彼の内的生活の發展の道程であるが、それを抽象的に述べたのでなく、彼自身此等三つの世界を順次に巡り行く物語を譬喩的に歌つたものである。而して其旅が如何にして初められたかは序に於て之を知ることが出來るのである

われ正路を失ひ、人生の羇旅半にあたりて、とある暗き林のなかにありき
あゝ荒れあらびわけ入りがたき此林のさま語ることいかに難いかな、恐を追思にあらたにし
いたみをあたふること死に劣らじ、されどわがかしこに享けし幸をあげつらはんため、わがかしこにみし凡ての事を語らん
われ何によりてかしこに入りしや、善く説きがたし、眞の路を棄てし時、睡はわが身にみち〳〵たりき
されど恐をもてわが心を刺せる溪の盡くるところ、一の山の麓にいたりて
仰き望めば既に其脊はいかなる路にあるものをも直ぐみちびく遊

―山川丙三郎氏譯より―

人生の旅半とあるは、詩人三十五歳の時の意であつて、之は詩篇九十篇の十節に、

われらが年をふる日は七十歳にすぎず

とあるより割り出して云ひし語である。詩人は此時一切の希望を失ひ慰むるものなく林の中即罪惡の世界をさまよひし時、ふととある山の麓に到り着いた其所に如何なる者をも導く遊星――太陽を見出でたのである。即ち眞理の光が遙かかなたに輝けるを見た。如何にもして此光に到達せんものをと、一歩一歩「たえず低き足をふみしめ」て彼は進み往いた。「低き足をふみしめ」とはダンテ特有の形容の仕方である。蓋高きに上らんとするものは、低き方の足をふみしめずしては上り得ぬ眞を表はした言葉であらう。

阪にさしかゝれるばかりなるころ、見よ一匹の牝の豹あらはる、
輕くしていと疾し　斑點ある皮これを蔽へり

豹は肉慾の象徴である。美はしき皮は陽の光を受けて一層其光澤をまし人を魅する如く思はれた。而して之は彼の進路を妨げし第一の誘惑であつた。次で獅子、狼等あらはれ來つて、彼の途を防ぐ。獅子は高慢を表し、狼は貪欲を表す。人生の暗黒な罪の林より、眞理を望んで進まうとした詩人の進路は忽にして、肉慾、高慢、貪欲等といふ實際生活の誘惑に出會ひ、全く行く方も辨へ得ず途方にくれて終つたのである。此時彼の導者として現れたのはロマの詩人ヴアジルであつた。

われかの大なる荒野の中に彼をみしとき、叫びてかれにいひけるは、汝魂か眞の人か何にてもあれ我を憐め
彼答へて我にいふ、人にあらず、人なりしことあり………

ヴアジルは、人なりし事あれど、今は人にあらずと自分を説き、詳に地獄、練獄の様をのべて、此二つの世界をへめぐり、終に天國に迄到達せられよと、心をつくして詩人に説き勸める。

ダンテは其物語りをきゝ、之は到底彼如きものゝ

達し得る所にはあらず

我エーネアに非ず我パウロに非ず、わが此事にたゆべしとは我人
共に信ぜざるなり

と、ヴアジルの折角のすゝめを拒まうとする、時にヴアジルは、彼が如何にして來り、誰の願ひによりて詩人の導者となりしかを語る。

我は汝をこの恐より解き放たんため、わが何故に來れるや、何事
をきゝてはじめて汝のために憂るにいたれるやを汝に告ぐべし
われ懸垂ノ衆とともにありしに、尊き美しきひとりの淑女の我を
呼ぶあり、われすなはち命を受けんことを請ひぬ
その目は星よりも燦かなりき、天使のごとき聲をもて言うるはし
くやはらかく我に曰ひけるは
やさしきマントヷの魂よ（汝の名はいまなほ世に殘る、また動の
やまぬかぎりは殘らん）
わが友にて命運の友にあらざるもの道を荒びたる麓に塞がれ、恐
れて踵をめぐらせり
我は彼のことにつきて天にて聞ける事により、彼既に深く迷ひわ
が彼を助けんため身を起せしことのおそきにあらざるなきやを恐
る
いざゆけ、汝の琢ける詞またすべてかれの救にかくべからざるこ
とをもて彼をたすけ、わが心を慰めよ
かく汝にゆくを請ふものはベアトリチエなり、我はわが歸るをね
がふ所より來れり、愛我を動かし我にものいはしむ

之をきゝダンテは、天上のヴィアトリスこそ、ヴアジルを惱める彼の導者として遣しゝなるを知り、勇氣百倍して彼の導くまゝに地獄の世界へと進み行く。

此世界には九つの階段がある、下に行く程、怖ろしさはいよ〳〵加はり、罪人が罰せらるゝ樣目もあてられぬものがある。九つの階段を下りきつた所から次の世界が初まる。之は煉獄である。此山を上り終るとヴアジルは、此山の頂に天國のある旨を告げ自分のつとめは此處迄であるといつて、ダンテを一人殘して去る。

此時彼の天國への旅の導者として現れたのはヴィアトリスであつた。然し彼女は最早肉の形をそなへては居らぬ。ダンテは彼女に慰められ勵まされつゝ一心に天國への道を上り行くのである。而して一つ一つ「低き足をふみしめ」つゝ天國の階段を上り

終に神の在し給ふ御座に到着する。

さて此詩の價値は藝術的或は政治的、歴史的方面から見る事が出來やう、然し之を宗教的に見て如何なる意味を有して居るであらうか。

ダンテにとつて人生は罪の生涯から免れ出で、自由と光とを求めて努力し、終に神の永遠の祝福を受くるに至る行路であつた。此行路をたどつて進むのが眞の人生である。而して彼は此課程を自己の經驗として神曲の中に鮮に書き出したのである。人生の行路は波瀾曲折極りなし、幼き時の清らかさは人間の心に根ざして居る罪の根に妨げられて到底健全な發達を遂げ得ぬ。先づ第一我等の道を妨ぐるものは感覺的欲望、名譽心、貪欲等である。此心を有たぬものは恐くあるまい。それらのものゝ爲に我等は罪の世界に陥り行く。とにかく罪惡の生活は人間の免れがたきもの、罪惡は我等の陥ることを避けがたき地獄である。然し我等にとつて之から自由になり得る道はないであらうか。ダンテは先づ第一に此道を認識に求めた。人は理性の認識により罪の本質其種類、其怖ろしさを知り、之によりてそれから免れることが出來ると彼は考へて居る。

第一及び第二の世界で彼の導者となつたヴアジルは理性の表象である。理性は人間生來の性質であり自然的能力である。而して人は之に助けられ、導かれて道徳的生活を送る事が出來る。聖書の敎へによらず、何等超自然の力を受ける事なしにでも、彼の理性の導きによつて人は或程度の正しき歩みをなし得るのである。異教詩人ヴアジルが此道程の導者として選ばれたのは此わけであつた。然し天國界に踏み入らんとせし時、彼が我が役目は此處にて終れりとて、ダンテを去つたのは何故であるか。之は理性の遠く及びがたき世界であつたからである。

第三即天國界は、神の永遠の祝福の中に、神と共なる歩みをなす生活である。而して之は人間の自然的認識以上の力、即ち信仰により、更に云ひ換へれ

ば愛によりてのみ達し得る世界である。理性は我々を助けて正しき道を歩ましめ、又神のほのかなる姿を見せしめるであらう。然し其教うる眞理は結局此世につける眞理であつて、其は神の殿堂の輝きに我々を觸れしめることは出來ぬ。ヴィアトリスは實に神の愛と其恩寵とを表現したものであつた。彼をして最も高く深き愛を感ぜしめ彼の生涯を通じて彼を導いたものは彼女であつたのである。神の形に似せて造られし人にとり最大最高の祝福なる神の中に生くる事に比して、理性の教うる地上の幸福、地上の眞理は、薄暗き燈火の如き感を與へるものである。我等の爲には人智を超越せる絶對の眞理がある。而して其は認識によつて知る眞理ではなしに、啓示によつて我々に示さるゝそれである。詩人ダンテにとつて人生は此光をたどり行く巡禮の旅であつた。而して之は柔順に信じて受入る事により、彼に與へられた恩寵であつたのである。

（講演筆記、在文責記者）

○自分の心を最も貴く動かすことが出來る人があるとすれば、その人は言行の助けを借らずに、もつと直接に人の心を貴く動かした人だ。

○自分が生かすことの出來ない程多くを知りすぎるのは、師には害があつて益がないやうに思はれた。

○笑はれるのを恐れるよりは心にないことを云ふのを恐れなければいけない。師は心にない事は一言もいはれなかつた。

○君達も自分を出來るだけ立派な人間にするのを本職にするがいゝ、それには第一反省が必要だ、他人を責める前に自分を省みるのが大事だ。

――幸福者より――

信仰生活の第一關門

受洗の決心に對し親の手强き反對をうけた場合、青年女子は如何なる所置を取つたらよいでせうか。

小野村林藏

啓上、御問合せの件は我々の屢々出會する活問題であります。之がためには時に脳を絞られるやうな思ひをすることがあります問題の性質は道理の上から行くなら至極簡單ですが、さて實際の情實から行くと、複雜な、困難な、時には途方に暮れるやうな場合があります。單純には御答へが出來ないやうに思ひます。親なる人の性質、身分、周圍の狀況や、本人の氣質、年齡や、其他の事情によりて、執るべき方針、態度に相違があるべき筈でせう。併し大體からいふなら、斯ういふ風に考へて進むのが宜くはないかと思ひます。

第一に、洗禮を受けるといふ事は、親の許可を得なければならぬ性質のものであるか何うかといふ事を決することであります。

親は子に對して或る程度迄の親權のあるべきであることは、當然であります。併し子に對する親權は絶對のものではありません。子もまた天地間に生を稟けて生れて來た一個の人として、先天の權利がある筈であります。例へば結婚の場合の如き、子が厭がるにも拘らずに、親が子の意志を無視して之に結婚を强いる如きは、明かに親の權限以上に乗り出したことで、不當であるは申すまでもありません。子が何人と結婚するかといふことは、親の一身上に非常な影響の生ずる事柄であります。それにも拘らず親はこの問題に就ては絶對的の權限は無いのであり

ます。或る限度以上は子の自由意志に任さねばならぬのであります。今日では法律も道徳も此精神によつて社會、人心を指導してゐます。

信仰は結婚問題から見れば、遙かに内實な問題であります。我々の生存其ものゝ根本に深く〳〵突き入つた、至深、至高の問題であります。心の奥の至聖所に秘められた生命の問題であります。親權はおろか、帝王の權威も之れに觸ることを許さない、我々の人格の根本核眞の問題であります。從つて之に對して兎や斯うと差出がましいことを親がいふならそれは確かに親權以上に乘り出したことで、親の不當を意味するのであります。

斯ういふ意味からして、私は洗禮を受けるのに親の許可を得なければならぬとは思はないものであります。

併し實際問題に接した場合に、唯純理によつて、眞一文字に進むといふことは、多くの波瀾や、悲劇を生ずる危險があります。無論我らは魂の核眞の問題である信仰生活の本領を守るためには火や水を恐れるべきではありません。切羽詰つた場合には、聖クララが爲たやうに、父母の家を捨てねばならぬ事があるかも知れません。けれども、出來得べくんばそんな危險を避けるのが宜しいと思ひます。別して今日の社會では信仰の自由といふことが廣く一般に認められて來てゐますから、よし頑迷な親達がたま〳〵あつたとしても、その頑迷を解く道があり得る場合が多いと思ひます。從つて賢明に處置するなら平安の裡に、了解を得る望みが多いと思ひます。

扨て、實際の場合に臨んで何ういふ方針を執つたら宜しからうかといふ問題になると、私は尠くとも三つの道が我等の前に横はつてゐると思ひます。

一、親に洗禮を受けることを告げて、公然と受けること。

二、親に告げずに受けること。

三、親の同意を得る迄か、或は親の干渉を受けない境遇に身を置くやうになる迄は洗禮を受けずに、

信仰生活を守ること。

一の場合は、親が反對しても信仰は自由であるといふ立場から受けるのであります。親に告げるのは子としての親に對する情誼からであります。之は公然受けるといふ點から、態度に堂々たる所があるやうですが、道理から行けば矛盾があるかと思ひます若し信仰が自由であるならば、何も親に告げる必要は無い筈だからであります。情誼上親に告げる位なら、親の反對に逆らつて洗禮を受けることはなほ更情誼上出來ない筈であります。

二の場合には二つの動機があり得ると思ひます。一は親の反對を恐れる所から秘密に受洗しやうといふ心であります。他の一つは信仰は自由であるから親の同意を得る必要がないといふ心からであります私は親に告げずに洗禮を受けました。男子で廿二歳でありましたから、親の反對なんか何んとも思つてゐませんでした。親を輕んずる意味からではありません。信仰の自由といふ信念から親の干渉を許さないといふ心でした。私は親の反對を恐れるから秘密に受けるといふ心には反對します。そんな人は寧ろ三を選んだらいゝでせう。

三は甚だふがい無い態度でありますが、年の未だ若い、思慮の充分に熟しない年頃の人は、之を選ばれるより他はないかと思ひます。

要するにその人の性質と、信仰の程度によつて、また其時の事情によつて、執るべき態度に相違があらねばならぬと思ひます。能ふべくんば親子の情誼上親の同意を得るが至當でありませう。若し親が反對するなら、あらゆる方法をつくして、親の基督教に對する了解に努力すべきでありませう。そして親の同意を得て受洗すべきでありませう。併し親が何うしても反對する場合には、以上の三手段の一を執らねばならぬ事になります。私はその人の心に從つて、三つの中の一つを自由に選ばすがよろしいと思ひます。

プレシコフスカヤ（抄譯）（四）

森田松榮

一八七四年七月の晴朗な朝、プレシコフスカヤは主義の宣傳使として、農民の間へと、コンミユーンを立ち出でた。同行三人の中ステフアノキツチは誠實熱烈な主義者で、年僅に二十歲、父は聰明な牧師で、三十個の學校を督し、多くの革命主義者に敎師の地位を與へてゐた人であつた。もう一人の同行者はマーシヤ・カルエンキナであつた。

三人は靴製造、及修繕、染色、塗物等の術をそれ〲見習つてゐたし、染色工塗師は行商であつたから、主義者にはもつて來いであつた。

三人とも農民の服裝をし、各自の職業に從つた道具と僅かの粗服とを入れた袋とを背負ひ、贋旅劵を携へてゐた。カザリンの旅劵には、やつと三十歲の彼女が四十歲と書いてあつた。百姓女の肩掛の下に上手に髮を丸めた風が、彼女をふけて見せた。木皮の大靴を穿き地厚のポテ〲したシヤツ、地太のスカートを着、黑い上着に赤い帶をぞんざいにしめて手や顏は染めてゐた。三人は從姉妹同志といふことにして通した。美しい日だつた。三人は樂しくてたまらなかつた。彼等の心には、全人類に對する愛が漲り溢れ、虐げられた人々に對する愛の中に、彼等は信仰の歡喜に似たものを經驗した。

然し筋肉勞働に馴れない二人の婦人にとつては、重い袋を背負つて、丸きり知らない地方を漂浪することは、なま易しいことではなかつた。途すがら、村の書記に旅劵を請求されて、それが調べられる間の心配な心持。「よし」といつて、うま〲欺された書記から橫柄に贋旅劵を突き返された時のホツとし

た安心。又、路傍に大詩人シェフチェンコの銅像を見て、農民の最大の友人だつたこの詩人を、農民がどれほど知つてゐるかと思つて、農民にきいて、「そんな人、聞いたこともないね」「貴族に尊敬されたどえらい人だつぺ」などゝ返事された時の失望と驚き。

何所にも宿を得かねて、重い足を引摺りながら歩ける丈歩いた揚句、辛やく辿りついたところは、一人の鰥夫で、家を貸すことは承知したが、汚なくてとても今夜は泊れないと云ふ。其時幸にも彼の親戚の老婆が、自分の所にお泊りなさいと云つて、親切にも食事の支度までして呉たはいゝが、其時老婆が三人に一つ宛くれた大麦パンは、今でもその臭を憶出すとゾッとするとカザリンが云つてゐる程のものであつた。三人は氣味の惡いヌル／＼したパンを少しづゝかじり初めた。遮二無二飲込んで了はうとしたが、とても駄目らしかつた。やがて、百姓から出てかういふ食物で育てられた偉大な人々の事を考へてやつとのことで片附けた。

食べながら三人は、求職中のいろんな困難を主婦に語ると、彼女は答へた。

「まあまあ、心配なさるにや及びませんよ。娘っ子達が肩掛を染めてくれろつてやつて來ますよ。長靴だつてさうですよ。仕事はたんとありますさ」

翌日三人は鰥夫の家を見に出かけた。壁は腐つてブク／＼し、床は破れて、風が敷物代りをし、蜘蛛の巣と鼠の穴だらけ。三人は汚塵の中に茫然と立つてゐた。恐らく自分達が見棄てゝ來た故郷の部屋々々にあつた柔らかい羽毛蒲團の寢臺や、美しい草花の鉢などが、心をかすめて過ぎたことであらう。貸主は平氣で、

「まだ新らしい暖かい肥料を畑からとつて來て、石灰に混ぜる方がいひでせう。結構な床洗ひが出來ますよ。それが濟んだら新らしい乾草をとつて來て、寢床をお作りなさい」

蟲蝕の床を塗る糊を作る爲に、石灰と肥料とを捏合せる仕事は、お孃樣育ちの二人には丸つきり初め

でゝあつた。二人は胸がムカ〳〵して來たが、たう〳〵やりおほせた。三人は荷物を運び入れ、新らしい藁も敷き、寢泊りする丈の支度はすつかり出來た然しカザリンとマーシャとは一睡も出來なかつた。といふのは、蠟燭を消すが早いか、いろんな蟲が、隱れ場所からゾロ〳〵這ひ出して、襲撃して來た。どうして、そんなに多くの蟲がこの家に住んでゐられたか分らないほど夥しい數だつた。こんな場合にもステフハノキッチは農民同樣眠れたが、二人の婦人はまんぢりとも出來ずに、絶間なく侵入者と鬪つてゐた、遂に轉々反側して寢床から床へ轉じたが、蟲軍は追撃してくる上に、鼠まで群がつて應援にくる次第。夜明方に强敵が退くのを待つて、ぐつたり疲れた二人はやうやく二三時間休むことが出來た。

やがて三人は職業を探しに出かけた。マーシャは自分の技倆の見本にハンケチに繪を描くし、カザリンも同樣靴を磨いた。ステフハノキッチは家の一隅に靴の小店を開いた。追々に華客が出來た。三人は彼等と打解けて話しをしながら、その狀態を細調査してゐた。

農奴の解放がこの地方では、何等の變化をも生なかつた事を、三人は知つた、といふのは此地方の土地はすべて政府の所有地で、私有地がなかつたからである。從て此等の農民は貴族の屬でなくザーの屬で、農民は寧ろそれを誇としてゐた。だからといつて彼等の境遇が少しでもいひといふのではなかつた。それどころか彼等には特別の不便があつた。林を所有してゐないから、薪を買はなければならないそこで自然薪を盜む、官有林盜伐で容赦なく罰せられる。けれども「自然」の不公平な林の分配法を咎めることはあらうとも、ザーを咎めることなどは、彼等は夢にも思はなかつた。反抗の氣分などは兎の毛ほどもなかつた。

「スメルナにや元氣な事があるぜ」といふ噂をきいた三人の使徒は、氣骨のある青年達が、常に貴族に反抗してゐるといふスメルナ邑に、赤いコサック帶

を締め直して出かけた。
スヌルナでは住民の大部分は砂糖工場で働いてゐた。ヲブリンスキーといふ伯爵が、廣大な荒莊地を貰つて、自分の領地から數千の農民を呼び寄せて、砂糖菜を栽培させ、粘煉所を建築させて、領地から市場に直輸送の出來るやうにした。邑は彼の使用する二三千の勞働者から成立つてゐた。此所で子供の時から育つて、もう結婚してゐる農民達は、小さな木造小屋の幾廓かに住んでゐた。未婚の職工と、他の地方から働きにやつて來た人達とは、自分達で山腹に穴を掘つて、家賃なしで住んでゐた。誰でも自分で穴を掘つて板を渡して、床にすればいゝのである。山々に散在してゐた此等の穴には、男も女も子供も一緒くたに群居して、性も社會的關係も顧みられなかつた。

山腹の人間の住穴は砂糖精煉場に近く、精煉場のそばには、伯爵の豪壯な宮殿があつた。貧弱の兩極端は一眸の中にあつて、吹いて來る風には、伯爵の庭園や料理場の香氣と、山腹の穴の腐敗した空氣とが入り混つてゐた。

三人の理想家は、結婚した息子の家の傍の小屋に住んでゐた老人を見付けて、說きつけて小屋を借して貰ふことにした。彼は八十歲だといふのに、丈高く、肩巾廣く、眞直ぐで、鬚は長く垂れ、活々した元氣な顏をしてゐた。彼は若い時、伯爵の領地で働く爲に、多くの若者と一緒に輸送されて來たのであつた。此土地を開拓する勞働は實にひどかつたもので、農民は息も絕々になる程ど鞭で打たれた。伯爵の仕打があんまり非道なので、彼等は一致して彼に當らうと決心した。老人は眼を輝かせて、彼が仲間を指揮したことを回想した。然し軍隊が派遣されて農民は彈丸を浴びせかけられ、さんざ鞭うたれた揚句抑壓された。彼は頭目だといふわけで、こつぴどく打たれ、幾週間も臥たきり動けなかつた。其以來反抗は一度もなかつた。

この老人はカザリン達とよく話をし、一寸した便

宜を幾度も呉れて、厚い好意を示した。彼は三人の貧乏なのを知つて、食事の招待にあづかる事をいつも斷つた。遂にカザリンは談話にといつて招き、それから議論の續きといつた風で、不意に彼に食事の仲間入をすゝめたりした。貴族の壓制に反抗してされる仕事に對しては、彼はいつも隨分熱して來た。

「我々は闘ふか死ぬかしなければならない。押默つて用意を整へてゐなければならない。默つてたゞ腕組みをしてゐるのではいけない」

とカザリン達が云ふと

「ああ、もう一度十代になれさへしたらなあ！冬は辛いし、俺は體が硬ばつて年をとつてゐる。それには若くなくてはなあ」と彼は嘆息した。三人はイヴンといふ若い農夫と懇意になつた。段々と話していくうちに、イヴンは叫んだ。

「貴族はボッチリしかゐないし、百姓は何百萬とある。稅金を納めるのは誰なのだ？　兵隊に出るのは誰なのだ？　國民を養ふのは誰なんだ？　百姓、さうだ百姓だけだ」

そこでカザリンは、當時主義者達が村々に散布してゐた「モーセとその四人の兄弟」といふ小册子を引出した。これは自由の原理の簡明な說明と、ロシア專制政治の批評とを、あまつたるい小說の中に、書き込んだものであつた。イヴン夫婦は讀みきかされると深く感動して、イヴンは「こりや有りがたい言葉だ！俺達の思ふ通りを話してゐる」

と云つた許りでなく、廣く仲間に知らせたいと云ふので、初めて職工の集會をイヴンの家で開くことゝなつた。その日曜日には、約四十人の農民がイヴンの家にゾロゾロやつて來て、椅子、食卓、窓敷居寢臺などに座を占めた。みんな片唾を飮んで耳を聳てた。カザリンも彼等同樣息を凝した。彼女の胸は長い間懷いてゐた希望の成就される嬉しさに波立つた。實に初めて彼女は、農民の家で、農民の集會に語るのであつた——學生にでもなく、敎育ある男女にでもなく、ロシア國民の基礎なる、粗朴な農民に

對して語るのであつた。

彼女は眼を輝かせて、明瞭でしつかりした、氣持のいい聲で、讀んだ。しんとして、一語一語に聽入つてゐた農民は、魅せられて有頂天になつた。讀み終ると多勢が叫び出した。

「ほんたうに！　なんて素振らしい言葉だ！　なんて尊い言葉だ！　ほんとうに眞理だ！」

この集會が當局者の耳に入つた。或若者が金を持つて來て、三人の自由の使徒に立退きを勸め、自身も危ないので身を隱した。誰も彼も別を惜しんだ。家主の老人は、深い感動を以てカザリンに話した。

「俺は家內と長年幸福にくらしました。けれど、あなたには、他のどの女に對しても有つたことのない感じがしました。あなたは千人に一人といふお人だ。あなたの仕事を、いつも、神樣が祝福して下さるやうに！」

以下はカザリン自身の言葉である。

「屢、密偵に裏をかゝれては、仕事をやり遂げずに私はす早く村を去りました。すると今迄の農民の一團は殘されて、自分達で集會を開くやうになりますさうしてゐる間に、他の指導者が變裝してやつて來るのでした。一八七四年といふ年には、教育ある二千以上の男女が農民の間を旅行してゐました。ウンザリする仕事だとあなたは仰しやるのですか。さうです。農民がのろくて鈍くて、自由の精神が幻影みたいに思はれる時にはさうです。けれどその精神が現實になつて來ると、ウンザリどころじやありません。それから又我々は時々同志と手を握合ひました我々はいつでも互に鼓舞し合ふことが出來たんです農民が我々の教理を受入れることを、我々はみんな知つてたからです。農民の熱心は燃え立ちました。たのもしい歡喜の言葉は、この群からかの群にと傳はりました。地下の組織も出來れば、通信暗號も發明されて、運動はロシアの三十六大州を通じて擴がり、確かりと益々よく組織されて來ました。遂に民衆黨が設立されるやうになりました。

英 文 欄

An Adventure In Friendship

Stevenson says that no one is useless who has a friend. And if that is true then there are not many people who are really doing nothing at all, for god has given to everyone of us the gift of friendship, someone whom we may love and serve. There is no real friendship without service, and yet that service is so gladly done that we never have a feeling that we are servants. We are sharing in a great partnership, we are working together for the best in each of us, and for a great servicé to those who are about us.

One day when Jesus was talking to his disciples, And was thinking of the great work that He was leaving for them to do, He said, "I do not call you servants, because a servant does not know what his master is doing : I call you friends, because I have shared with you all that I have learned from my Father." And so Jesus sends each one of us out, to work with Him in making the world a better place, with more of friendship in it, and a knowledge that God cannot work in the hearts of men, until into our lives can come this sense of friendship with Him, this sharing in building a beautiful world.

When the French tried to build the Panama Canal, a tremendous piece of work cutting through mountains, which would be such a help to the shipping of the world, they gave it up after it was half finished, and sold it to the United States. When America began building the canal, she also built homes for the workmen, provided doctors for them, treated the workmen as friends of the men who were planning the canal, and the beautiful cut through the land was finished, though many said it could not be done.

When we first began to have factories, the workers were treated as servants who had to obey the orders of the managers, without feeling at all that they were sharing in a great work that was helping the world. Gradually we are learning that that is not the way to make a beautiful world, for everyone must have a feeling that she is helping in a gr at task, if the task is to be done well. In Japan there is

one factory where the workers all share with the owner in all the profits. The silk went to America, and one day word came back that the silk from that factory was the best in quality, and they wanted more at once. But trouble had come to the owner, and he did not have money to buy the raw materials and to pay the wages of his men. They offered gladly to work without wages in orders to send the silk, and they did. They were his friends, not his servants.

You and I are working together in a great task of making the world more like the Kingdom of God. That means that we begin with our everyday life, our relationships with others. For we must be friends. Friends? with that person who criticizes us, who is unkind to us? Is Jesus there in the heart of that person, and must we serve Him there? Yes, Jesus asks that of us, friendship real and sincere, toward those whom we do not feel that we like, toward those who are unkind to us. He says that we must not come before the holy place of God for rest and peace, until we have put out of our hearts any unkindness toward another. This is the great adventure in friendship, this difficult thing for us all, to close each day with friendship in our hearts toward all, and to begin each day with a deep desire to serve whomever we meet.

And then there is that dear, tender other side to the Great Friendship. When the difficult day is over, we can turn Home for a quiet time with Him. We tell Him our successes and our failures, as we shut out other things and talk with Him alone. Sometimes He will bring to us a great sense of rest and peace: and sometimes He will take us up on the mountain top and let us catch a great vision of the Spirit of God at work in the world, and sometimes He will stir up within us a restless dissatisfaction, a feeling that we can be so much better than we are; a friend's dear honesty in showing us that He expects finer things of us than we have showed this day! He is there always, wherever we are, and we can seek from Him the strength we need.

"Speak to him, thou, for He heareth,
Spirit with spirit can meet,
Closer is He than breathing,
Nearer than hands or feet."

永遠の開拓苦に生きんとして

山澤榮子

私は、例へば癒ゆる日のしれざる病苦のその身となれども生きんとする人間の道をさがします。

私は、より本當な生活への燒かれるようなはげしい魂の欲求の爲には、既成の何物をでも破壞いたすのです。その破壞とは建設への通で、ちつとも滅亡ではないのですから、人間性必然の發展への止みがたい勢力なのですから。

私は今、その苦腦に生の眞相を發見せんとし、そのもの丶中に尊とい人間性の眞實なすがたをたずねあてようとします。その巷にあつて私は魂の藝術を思つてゐます。永遠の開拓苦腦の巷に——たとひそれは小さいことでい丶のです——魂の生み出す藝術の創造生活の體驗者で、私はあり得たい。

しかし、しかしさうですけれどもその希求をさへ失はんとするかなしい人の子のすがたを私はもつてゐました。ほんとうに苦しい闘ひです。

か丶る中には私は人間に失望します。私自身に失望します。時に憎み心さへおきて、しかも人間にかぎりなく期望をかけて私はゐました、——眞に愛さうとして愛し得ない、けれども愛せんとして止まぬ魂のすがたを自分の中にみるのです。

永遠の發見と開拓にふるひたつ人間の生命が、どうして苦腦なしに生きられるでせう。否眞の苦腦の深き體驗の日こそ私の眞自己の發見であらねばならないでせう。さう思ひます。そこにて私は限りもな

き生命の自由による魂の生長をみはしないでせうか

地上に來る日を信じての、平和の世界の建設に生の意味を見、その爲に生きた私の魂は、今その全部を永遠の苦闘をするこの人間性の巷に生かされてゆくのです。これは地上に生くる者の本當の運命であることをしるのは、空なことだといはるべきでせうか、私はその努力を尊いと思はざるを得ません。私の開拓苦は無限の上にこそ確立を得ます。いこひの地はいづこでせうか、私の彼岸はつひに永遠であつたのです。

必然をかゝぬ變遷は、苦しき運命を負ひて生き出でし人間の子の貴い歩みの跡ではありませんか、私は私自身の流轉をかへりみて、はかなさを感じました、そしてそこに生み出されし紀念物の無窮に流れんことを求めました。果敢なさと惱ましさの世に出來て、けれども眞に生きんとする者がその魂に不滅のねがひを抱くことは、何といふ尊とい事でせうかかゝる人間のすがたに私は畏敬を感ずるのです。苦しみの大きい力強さをしります。

淋しい道を歩ゐてゐる私の今日までの歩みは、私にかゝる發見をおくりました、この道が眞に歩むことによつて私は私らしい覺醒がみられようと思ひます。この考への上に立つ生活が愚かであると人はいつても、私の眞實です。私は力を養ひつゝこの道を開拓してゆきます。

生きてさへあればと人のこともなげに
はなすをきゝてかなしくなれり。

おもふことさぐるごとき心にて
人に逢ひけりゆるしたまへや。

默々とかしこに友は生くるなり
尊とき君よわれもこゝに生く。

不思議な旅人（讀書紹介）

村岡花子

霧深いロンドンの町のとある下宿屋での出來事、今しも此の家の主婦を訪づれて來たのは、暫く前から空いて居た三階の小さな部屋を借り度いと言ふ一人の旅人でありました、貪慾な主婦は法外な下宿料を要求しますのに、旅人は一言の不平もなく、點頭いて居ります、主婦は何と言ふ事もなく、この人の氣品に打たれて、我が身が恥かしくなり、つひ今の今言ひ立てた下宿料をずつと安くして、此の人を此處に寄寓させたのです。

退職軍人の夫妻に其の一人娘のビビアン、男爵の親戚だと言つて二言目には貴族連の名前を持出す未亡人、貧乏な天才畫家、寄る年波を白粉や紅に隱して、四十を三十代に見せようと苦心する獨身婦人、斯ういふ面々が此の家の下宿人で御座います。何も彼もが虛僞と虛飾で蔽はれた家なのであります。

兩親の借金を返す爲め、若い、美しいビビアンは父親と言つても可い程のライト老人と結婚しようとして居ます。自分が愛して居た聖らかな處女のビビアンが娼婦にも等しい態度に出たのを見て、青年畫家クリストファーはつく〴〵金力萬能を思はせられて、理想を捨て、藝術的良心を殺して、卑しい繪畫に不美の財を積まうとしました。ビビアンの中に自重心を蘇らせ、クリストファーに理想を與へ、ライト老人の情欲を變へて美しく貴い犧牲的愛情として、思ひ合うた二人に聖い家庭を結ばせる媒とさせたのは不思議な旅人の力でありました。彼は醜い是

等の人々の弱點を責めはしませんでした。其の缺點を取り上げて、批評はしませんでした。其の弱點や缺點は同時に長所となり得る事を知つて居たのです。四十といふ年を苦に病んで、頻に若い姿を裝うて居る、ミスカイトに向つて、此の人の言つた事は斯うで御座いました。

旅人「青春時代の生々とした心持は未だ／＼四十といふ若さでは消えないではありませんか。そして、人を憐れむ優しみは充分に附いて來る年なのです。四十歳！　何といふ美しい年配でせう」

ミスカイト（腹立たしげに）「エ、／＼然うでせうとも、貴方から見たら、どんな年でも美しいんですよ。多分貴方には私でも美しく御見えでせう」

旅人（眞面目に）「如何にも其の通り。貴孃はお美しいのぢや―ほんに美しい。唯一つの瑕瑾が有る惜しいものぢやと思つて居ます」

ミスカイト（捨鉢な調子で）「御遠慮なく仰つて頂きませうよ唯一つの瑾瑕ぢやほんとに惜しいものですわ。伺つたら直せないとも限りませんわね」

旅人「其の瑾瑕と言ふのは、虛榮心の足りない事です（ミスカイトは妙な表情で旅人を見返す）貴孃は鏡に映る御自分の顏を見て、不足に思つておいでなさる。それは馬鹿らしい事ぢや。失禮な言分ぢやが、誠に馬鹿な話ぢや」

ミスカイト「では貴方は私が白粉も頰紅も附けない方がいゝと仰るんですね」

旅人「そんな物は無しの方がどんなにか貴孃御自身が美しくおなりぢやらうと私思ひます。淑やかな、美しい御婦人、成程、少し顏色は青いかも知れない―然し、同じ薔薇にも白もあれば紅もあるぢやありませんか。上品なあなたのお顏には思慮深い青白さが有るのです。其處に貴孃の性格が表はれて居るのです。それには白髮は適はしい冠ではないのでせうか持つて生れた其の顏形こそは貴孃の性格を映し出す鏡ぢやのに、何を好んで、それに色々の色を塗り附けるのでせう。

ミス・カイト「貴方には解らない。世間は——世間の人は——年取つた婦人を馬鹿にするのです」

旅人「世間の人達に「年取つた婦人」でも（微笑を含み乍）美しくなり得る事を知らせて、あの人達の誤つた態度を直してやらうとは何故なさらないのです」

斯うして、旅人は一人々々の中に潜んだ眞珠を堀り出して、美しい性格に導いて行くのです。

彼は、總べての弱點と缺點を許し得る廣らかな心の持主であります。そしてこれこそは私共の主イエスの御性格ではなかつたのでせうか。

私は非常に此の劇を愛讀して居ます。幾度讀んでも讀む度毎に新しい感激に打たれるので御座います。ジエローム、ケー、ジエローム著の"Passing of the Third Floor Back" （三階部屋での出來事とでも譯しませうか）といふ題で、ロンドンのハースト、ブラケット會社から出版されたもので御座います。丸善書店で求められませう。

なるべくは日本語のものをとの編輯者からの御注文でしたが、近頃餘り讀書の時を持たぬ私は敢て皆樣の御一讀を御勸め致し度いと思ふ程の物を手にする機會がありませんでした。英書では御座いますが大した文章も難解ではありませぬ故、英書を御讀みの方の爲めに、此の一篇を書いて、編輯者への御詫に代へました。此の劇中の旅人——其の行く所々に光明と希望をもたらす此の旅人を——誰と解釋なさいませうか。それは讀む方々の御心に任せて置きませう。

× × × × × × ×

講演断片

新日本の世界的使命

杉村陽太郎

歐洲戰爭の中での大激戰は大正五年六月廿一日に於るヴエルダンのそれであらう。之が即ち獨軍敗北の分水嶺ともいふべき戰ひであつた。斯の地方に行くと今も案内者が、此處には一メートルの中に、噸半の鐵が埋つて居る。而して貴下の足の下に平均三人の死人が居ると說明してきかせてくれる。此大戰に於て有爲な壯年靑年で負傷した者が三千萬、日本の人口の五割三分で、死人は東京の人口の約五倍といつてよい。而も戰爭に要した費用は皆で六千七百億萬圓で、現在の日本の七百八十年間の國費に相當する。而して世界七十七ケ國は其半分の費用で一ケ年間國家を經營して行く事が出來るといふ。然し之にも增して悲しむべき事は有爲な靑年や智識階級の人々を多く失つた事である。戰爭にはどうしても無理がある。吾等はどうしても之を絕滅しなければならぬ。

然し世界の平和といふ如き事は、今日の如く國内に勞資のねらみ合ひがあつたり、男女の爭鬪が行はれたりして居ては、到底實現し得るものではない。我々はどうしても個人個人がもつと正直になり、自分といふ小い考へから脫して、人類の爲め世界の爲めを考へるやうにならねばならぬ。此處に最も必要な事は、心の革明である。之なくしてなされる制度組織の改革は本末の顚倒といふべきであらう。

—聯合同窓會にての講演の一部—

言論の自由

吉野作造

言論の取締りの嚴なのは、今日の日本ばかりではない。今から二百年程前の英國、佛國は實に嚴しい制裁を此事に關して加へたものであつた。然し其結果の極めて惡かりし事をさとり、今日は彼の國々では非常な自由が與へられて居る。英佛の當局者等が彼等の實驗を通して學び得た事は何であつたか。即ち彼等は人間の本性は、打やつて置けば而して順調な境遇を與へれば What ought to be の事を自然行ふものであつて、壓迫は反抗を生み反つて人間の本然性にもとる行爲を敢て行はしめるものであるといふ事であつた。

今日我國の當局者達も此道理をさとり、彼等の誤れる考へに改善を加へられたきものである。即ち人の本性の善なる事を信じて、問題の解決をつけられん事を望んで止まぬ。然し彼等が人の性の善なる事を信じ得ないのは、彼等自身の本性を充分信じ得ざる所に原因するのではあるまいか。斯くしては此問題は到底解決すべきものではない　故に今日の我が國にとつて、最も肝要な事は、キリスト教的の人生觀をして國民の思想の根底となし、此精神を國民の間に徹底せしむる事であらう。

人生最奥の要求

森明

我ねがふ所の善は之を行はず反つて願はざる所の惡は之を行へり

之は基督教人生觀の一端である。一體吾等は何を目的として生活して居るか。吾等に何等かの要求があるか、あれば其要求は如何なるものか。吾等は何を賴りに何を生命に此人生の步みを正して、よく目的を遂し得るに至るのであらう。

天地間の存在物を二分して考へて見ると、獨立して存在して居るものと、依つて存在して居るものとの二つとなる。前者に屬するものは神御自身の他に

ない。而して他のあらゆる存在物は何かに依つて存在して居るのである。して見ると要求のあるのはむしろ當然であつて、之は魂の健全な狀態といひ得べきであらう。果して然らば其要求は何か。而して其の對照物は何かといふ問題を考へねばならぬ。

人間本來の要求は限りないものに到達しなければ決して滿足し得るものではない。然るに吾等は限りあるものに依つて此限りない要求を滿たそうと常にあせり苦しむのである。人生一切の要求も、其一點大切な要を握つて終へば、他の萬事は之によつて滿されて行くのである。其要は實に神御自身に他ならぬ。神は吾等の原因であり、又吾等の意識の根本である。人の心は彼に歸る事によりてのみ眞に滿さるゝに至るのである。

吾等の最奥の要求は實に此一點に歸る事により、完全なる喜びと滿足とを經驗し得るの他はない。

・・・・・・

紐育の山本琴子氏より

あれこれと紐育の世界は出來事が多く考へが何かと亂れて落付いて思ひを綴ることさへ出來ずに居ります。只今も前のレキシングトンの芝居小屋でアイリッシユの大集會があります。三日午後は日本人聯合の禮拜で日米問題を主にした平岩博士の御話をきゝ、思ひはそれに捕はれて居ります。先日もセントパトリックの日に堂々とアイリッシユの男子が鐵砲をかつぎ大行列で第五街　ねり歩き大示威運動をやつて居りました。紐育の天地、紐育の思想はどうなるのでせう。此亂れた大混雜の中に人は歸着すべきもの、不動不變のものを見出し、改めて確く信念にたちなほす必要があると思ひます。確に人間をためす神のお仕事であると私は信じて居ります。日本の天地は如何でございますか。日本が正義を守り神を拜する國として立つて欲しいと此頃程深く思はせられる時はございません。

斷片

岡崎小文

伸んとする生命
伸さんとする意志
二つの者の會つた時の歡喜
祝福は兩者の上のみでない
世の進歩がそこに始まるのだ。

○

信じられ愛せられる程
人の生命は伸て行く
偉大の業もそこに生れる
若い人を信ずることと愛すること
其眞劍の現れが天國を生む。

○

新緑がブキ〳〵と伸て行く
その中につゝまれて居ると
心の底から喜と力とが湧き出る
聖靈に充たされた人のやうに
「力ある精神——眞を行ふ力
愛の心、眞を知る受容力
健全なる精神、眞を愛する力」
ジョエットの言つた姿をよし瞬時にでも
己の中に感じるのは嬉しい。

○

悲しむ者は幸だ
人の爲に己の爲に
眞暗い苦しい冷たい空氣の中に
うめくかも知れぬ
だが其後に來る光は喜は
そのうめきなしには得られぬ賜。

○

私が懸命に積んだ寶
もう小山となつたかと
ほゝゑんでのぞくと

見憎い顔で見返すか
さもなければ何もない
二六時中あせつてした事
積んだ覺えのない所に
こゝに貴女の寶の山が
こんなに輝いて
幾人に喜と光とを分つた事やら
思ひもよらぬ此のさゝやき
知らずになげた愛の心。

○

智者はある學者はある
事業家はあるしかし
眞に善良な純潔の人士は稀だ
優しい心を打壞そうとする者が多い
だが決して敗けてはならぬ
何所までも清く何處迄も正しくてほしい
馬鹿と言はれても、まぬけと言はれても
若し正直なことと親切なことが馬鹿なら
自分は馬鹿でありたい
だがそうした考をもつてる人を
改善しなければ眞の平和は來ない。

○

幾億萬人の兄弟の中
私どもの出遇ふ人は少數だ
ついお隣の人でも知らぬ人がある
幾百里へだたつた所の人に知己もある
時と所とをへだてゝも
私どもの魂を動かしてくれる靈もある
地上に生くる日出逢ふ凡の人は
深い〳〵ゑにしだと思ふ
どんな人も憎まずに
心の誠をむけたいもの
深いゑにしの兄弟に。

逝く妹を看る姉の日記

A・T

二十日、發熱四十度二分、可哀想に苦しいだらう、寢て居ても母を心配させまいとてか「苦しくないのよ」と云つてる。私は涙ぐめてたまらない。

廿一日、急いで歸宅、肺炎を併發、或は…………から云ふ考へが自然に起る。打消しても〳〵起る。夕の鐘がゴーンとなつた。眠つて居た筈の彼女が、「鐘がなる、かねが鳴る、今日も送りぬ主に仕へて」きれいな聲で歌ひ出した。ゾツとして私は默つて様子を見つめて居た。

「いてひをつぐる夕べの鐘」彼女は歌ひ終つて、目をうすく開いた様子。「あゝ夜が來た、いやだなあ夜が來た」實に悲しそうに云ふ。「夜がなければ月もない、星もない、でもいやだ、眞暗でおゝいやだお母さん、時計を進めて戴きませうか」――彼女は私の時計を貰つて片時もそれを離さなかつた。桃色の絹の紐をつけて小さい十字架をつけて――

何私はじつと彼女の云ふ事を聞いて居た。限りなく云ひつゞける。

「あゝ呼んでるわ、あんなによんでるわ、いくちやんとお父さん、行かうかしら? いけないの?どうして皆とめるんだらう、そんなにいけなければ今夜一晩考へるわ。お父さんもいらしつた。いくちやんも居た、お父さん隨分肥つたわ、いくちやん瘠せてたわ、何故でせう、早く行つていくちやんに範坊の話をしてやりませう………」私は水をあびたやうになつた。まだいひ續ける。私は默つてときれときれ

に云ふ彼女の言葉を一言もきゝ落すまいとする。
「あたし幸福ね、どつちへ行つてもいろんな人が居るから、お父さん、いくちやん、野老山さんの妹、まだあつた、誰でしたつけ。私はいくちやんに物云つたことはないのよ、似てるつて云はれるけれど………いゝわ行つたら話するから………。お父さんと餘り口にしなかつたわね、お母さんや小姉ちやんや勝ちやんのやうに。だつて何所へも伴れていつて下さらなかつたんですもの。いゝわ行つたら三人で遊びに行くから…………。でも行つちやあいけないかしら、お母さんに叱られるかしら、行く者よりは殘る者に………つて云ふから」
　餘り云ひ續けるので氣味が惡くなつて勝ちやんを呼んで來る。意識は明瞭の樣で明瞭でない。胸は一杯だが急いで書取つておく、彼女は行くといふ、何所へ行くつもりなのだらう、天國？　あゝやつぱり彼女は死ぬのだ。
「あゝ歌ひ度くなつて仕方がない。どうして聲が出ないんでせう。安井さん（近所の醫師）に出るやうにして貰ふかしら」暫らくたつて突然、
「私大變な事をしちやつた。大切な叔母さんを忘れてた、ほら武ちやんのお母さんよ、そして武ちやんも居るわ、あゝさう〳〵片桐さんのコーちやんも、でも私はよく知らないけれど、一足先へ行つて皆を喜んで迎へて上げやう。あゝまだ草川先生の奥樣もいらつしやる。お目にかゝつた事はないけれど先生に術をして頂いたからお話して見ればわかるわ……
…」勝子は涙をこぼしてた、私も涙が出て來る。知れないやうに二人でそつと涙をふいてゐると、
「何したの？　何か悲劇でもあつた樣ね」と云ふ。斯ういふ所など實に齒切れのよい彼女の性格を表してる。はつきりして居る。二人はハッとして顔を見合せる。
「あゝ星の中に入つて行きたい。月は何だか平凡できらいよ」、頭を使はせる事を恐れて私は默つて聽きいてた。もう彼女の死を私は覺悟した。

廿二日、一日床の側に居る。床の間の側へ寢床をうつす。目がうるんで來た。夕方電燈がついた時、
「あゝ夜だわ、どうしませう」何といふ悲しそうな聲であらう。「ハルちやん、夜がなければ氣持のいゝ朝もないでせう、夜が來たつて小姉ちやんが起きてゝ上げるから大丈夫よ」と云へば、
「えゝさうね、苦しみあつて樂しみある世の中」斯ふいつて口を噤んだ。
「あたし御願があるのよ、歌つて頂戴な、でも今は夜で喧かましいといけないからあしたね」實際歌つてやらうにも涙で歌へなかつた。此夜苦痛甚し。うなる聲が時々ゲッセマネの歌になる。ヨーハ、フケワ、ター、リー、ヌー クーセ マ、ネノ、ソー、ノー、ニー。實にとぎれとぎれに。「歌つてます。あゝうたつて居るんです」と私は母に云ひながら、自分の涙に聲をのんだ。
廿三日、なやみの一日は過ぎた。夕方「あゝ忘れてゐたわ、でもいゝわ、いくちやんの所へ行つたらして貰ふから」、私はハッとした。きつと歌だ——
「歌？」ときくと「えゝさうなの」涙で歌へぬ勝子を促して百七十を歌ふ。いつもした習慣で、勝子のソプラノに私がベースをつけて居たら、呻つてた彼女が實にはつきりときれいにアルトを入れる。あゝ其時の感。苦しそうなので二節歌つて止める。
「その次よ、我に何の功績あらん」から促した。四節迄續いて歌ふ。
死の床より起る其日—— 涙は止度もなし。
廿四日、黎明の光を彼女は喜んだ。中濱博士、安井醫師對診、看護婦來る。博士の診察の結果、結核性腹膜炎、腎臟炎、肺炎。あゝ生きはせぬ。二三日來晝夜シャックリの絶間なく、目もあてられぬ苦しさ。母上の作られたアイスクリームを喜んで食べた。
「いくちやんにお土産はアイスクリームにしませう」といふ。
星先生より來電、「ゴビョウキヘイユヲイノル」涙ぐむ。「もう先生は知つていらつしやる。どうしてだ

らう。」と獨語。

「あたしね、欲しい花が一つあるのよ。取りに行きたいの、いけない？」「ひとりではいけないんです」私は答へた。「でもね、一人以上ではいけないんですつて、たつた一本なの、欲しいわ、咲いてるんぢやない、誰かゞ咲かして呼んでるは、あたしを」水をあびたやうにぞつとする。「あたし白い花いゝけれど淋しいからピンクのが好きよ。お友達に花を上げたいのよ。一つ宛。」ウトウトしながらのべつに語り續ける。「あたしが死んだらね、小さくてもいゝからきれいな花輪ときれいな歌を歌つて埋めて貰ふの、（苦しみはなほ烈しい）　「でも私ちやんと御祈りがしてあるのよ」「何んて？」「安らかに今夜休まれます樣につて」あゝ、あゝ、其祈りはきかれない。

廿五日、また夜が來た。食鹽注射をする。痛いだらう。幸子が泣いてたら、「代りに泣いてくれてるわあたしより小い人で苦しい人もあるんだから仕方がない。」此夕べであつた突然、

「りつ子さん〳〵！　りつ子さんてばひどいわ、逃げて行つて了つたわ」と云ひ出したのは。

「ハルちやんエス樣の十字架は？」靜かに尋ねて見た。

「えゝ、いつも〳〵それ許り考へつゞけて居るの」はつきり答へた。あゝ祈れぬ姉の胸は苦しい。

廿六日、今日は病院へ行くといふので氣が張つてる樣だ。時計を持つて行く事を忘れないでくれといふ。寢臺自動車に移る。私を枕邊からはなさぬ。搖れる度に私の心配するのを見かねた彼女は、「ちつともひどかないわ、搖りかごの樣よ」と云ふ。

「ネムレネムレ」を靜かに歌つてやる。元氣をつける爲に。「もろ人こぞりて」「みどりのまきばに」を小さく歌つてやる。脈が絶えた樣にして居る彼女はアルトをしつかりつける。二人の聲の流れ、自動車の中に再び求め得ぬ二人の聲の流は充ちた。

廿八日、一日授業を經へてすぐ病院へかけつける。午後三時、りつ子さんからの手紙が來て居た。袴の

聞、すぐエプロンをして「歸つてよ」と云つた時うなづいた。「小姉ちやんだけさすつてね」看護婦の手を斷つて淋しくニッコリ笑つた。「甘つたれ子」私も笑つて見せた。あゝ心では泣いて居た。

「りつ子さんから手紙でね、教會の皆樣がお祈りしてゝ下さるんですつて」といへば、靜かに二三度うなづいて見せる。肺に來て居る苦しさうな咳は私の胸をザクリとさす。死期は近い。

「お母さんお母さん、小姉ちやん小姉ちやん」云ひつゞける。苦しんで〳〵其揚句「こつち向いてトロトロ眠つて見ませう、だからみんな休んで下さい」といふ。たえ入るやうな咳を二つ！　兩手を差しのべて一二三といふ。「どうするのよ」ときけば、「起きるのよ」と烈しく云ふ。どんなに苦しいのだらう?!

「靜かにして頂戴、起きたらいけないから」

かういつた刹那であつた最後の息を引きとつたのは……………午後四時四十分。醫師も看護婦ももう來ても駄目、靜かな死！　は到達した。最後迄少しもやつれず、あのバラ色の頰もあせなかつたが、此時サット血の氣が失せた。

「チイネエちやん、空と海とどつちが淸いでせう」と申しますから「私空の方だと思ふわ」と申しましたら嬉しさうに

「えゝ私もさう思ふの、だから空へ行くのよ…………地球が一番きたない。人間が居て…………。こんな所にもう居たくないわ」

靜寂な死！　天國へ、もう召された、彼女は星の空へ……………。

× × × × × × × × ×

雑感

浅井治子

○

如何に高貴な仕事でも俗物の手にかゝつては俗化せざるを得ない。仕事はそれをなす人以上には高くも清くもなり得るものではない。そして私達の心を支配するものが同時に私達の仕事を支配するに至るのは止むを得ぬ事である。仕事が人を作るといふ事は慥に一面の眞理であらう。然し仕事は又私達によつて、卑くも清くも、低くも高くもせられつゝあるものである事を記憶せねばならぬ。

○

正義は最後の勝利者であるといふ事は、誰もよく知つて居る。之はむしろ平凡な眞理とけなされて了ふことかもしれぬ。然し「ひとつの眞理を知るといふ事とその眞理を所有する事とは全く別事」である。義しきを歩んで一人殘された方が、萬人を友としていゝ加減の生活をするより何程尊いか知れぬ。最後の勝利者は正義である。何となればよしすべての人が之に反するとしても、神は必ず味方し給ふから。

○

よき實は善き木にみのる。そしてよき木は善き種子からでなければ生じない事は無論である。私共の生活には實際、いやになる程小刀細工や彌縫策がつきまとつて居る。日常生活にも信仰の生涯にも、亦我々の仕事の中にも、危つかしい所の見えるのは其ためではなからうか。本當の人格、本當の仕事、共に外部からつけたものではなく、内部から滲み出て來るものでなければならぬ。其所にこそ美があり生命があり人の魂の底奥に迄響く神秘な力が存する之のない人も仕事も、たとへ如何に美しく偉大そうに見えても、結局それは無生命な形骸に過ぎぬ。それに接する人は空虚な響音が耳から耳へガーンと響いただけで、後に何物も殘らないうら淋しさを經驗

せしめらるゝことであらう。

要するに改造とは木の植え代へをすることでも、接木や差木をする事でもない。精選した種子を新規に蒔きなほす事であると思ふ。

小刀細工をして居る間は眞の人格は築かれない。彌縫策では本當の仕事は出來ぬ。

○

心から喜んでなす仕事を與へられたものは眞に幸福である。彼にとつては其仕事それ自身が、彼の樂しみであり望みである。其爲めに苦しみなやみ骨折ることが多ければ多いだけ、彼はそれをます〳〵自分のものとする事が出來る。彼は其仕事の爲に生くるのであつて、生くるが爲めに働くのではない。人は誰しも彼自身の仕事を與へられて居るのではあるまいか。其場所は彼以外には占める人のないやうな家庭の中に、學校の中に、團體の中に、喜びの時も悲しみの日も「我之がために來れり」と心から叫び得るものは幸福である。

○

吾々に人の魂に對する熱愛の乏しいこと、人の罪を我が事の如く思ひ、人の重荷を我が重荷として苦しみ得ぬ事、其原因は何所にあるのであらう？私は思ふ、私達の心の中に神の愛に對する感激、基督による救ひに向つての歡喜が溢れて居らぬからではあるまいかと。更にそれは信仰が私達の靈魂の經驗となつて居らぬ證據であらう？私達の中に救の歡喜が充ちて居れば其を人に分け與へずには居られぬ筈である。消えた街燈のやうな信者！彼は何年立つて居ても光を與へぬのみか反つて人の躓きとなる。

あゝ、けれど之は人事ではない、誡を破る力のみ旺盛で、守る力の絶無な私、等らに赦しとあはれみとを乞ひつゝ祈る事を免されて居るやうな自分。幾人の人の躓きの石となり、信仰に入る妨げの岩となつたことであらう。恐れ慴かざるを得ぬ。私は唯祈る。

主によりて生き動き在る事を得しめ給へ、と。

ピリピ書講解（九）

佐波亘

□ピリピ書三ノ五、六はパウロの理想であり誇りでありましたが、また實にそれは彼の最も利益とする所でありました。即ち彼は人生に於ける最大幸福は血統、門閥、儀禮、道德、力などにあると思つたのでした。然し乍ら人生には斯る外部的の幸福の外に内面的の、言ひ換れば精神的、靈的の幸福があるのです。これは議論ではありません。事實です。經驗です。

□そこで三ノ七に「されど曩に我が益たりし事はキリストのために損と思ふに至れり」とあるのです。こゝではこの「されど」といふ一字が大切です。「されど」は實にパウロの生涯に大なる革命が起つたことを語るものです。「されど」は小說で言へば上卷と下卷、前編と後編のやうなものです。或は「されど」は前の生涯を埋葬して、新しい生涯に復活するための一つの墓石とも見られませう。或はまた「されど」は向上の一路の踏段とも見られます。それはまた實に私共が天の者になるか地の者となるかの分界線です。イエスのゲッセマネ園に於ける祈りを見ると、「父よ御旨ならば、此の酒杯を我より取り去りたまへ、然れど我が意にあらずして御意の成らんことを願ふ」（ルカ傳二二ノ四二）とあります。畢竟するに信仰生活とは「されど」の多い生活を言ふのです。よい祈りとは「されど」を伴ふ祈りを指すのです。

□こゝにパウロにはこの「されど」を基點として、人

生に於ける「損」「益」を淸算して居ます。彼は何を標準にしてそれを勘定しましたか。それは言ふまでもなく「キリストのため」といふのでありました。即ち彼の前生涯はすべて「自己のためで」ありましたが、今やそのすべてが「キリストのため」に代つたのです。そして彼は其所にはつきりと損益を見出したのです。私共も毎日損だ得だといつて暮して居ます。さてその損益は果して何を標準にして定めてるでせうか。

□人生に於ける貸方、借方、プラス、マイナス、それは人生の決算をする場合に大なる關係があります。それ故パウロは……こゝにそのことを繰返してさらに一層强く言つて居るのです。『然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、之を塵芥のごとく思ふ』とあるのがそれです。

□信仰生活に於ては、價値の標準を量よりも質に、長さよりも内容に求めます。即ちものさしではからずにはかりを以てするのです。然し乍ら此世の一般普通にするところは量です。ものさしです。イエスは仰せられました。「人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや」（マタイ傳十六ノ二六）。實に人生は大なる取引です。私共は何を標準にしてその取引をしませうか。

□抑も人生は神祕です。それは常に變化と驚異に圍まれます。そして價値はもと關係的なもの相對的のものでありますから、いたづら盛りの男の子にとりては、蟬一つの價値は或は大きいダイヤモンド一つに優るかも知れません。パウロも『われ童子の時は語ることも童子のごとく、思ふことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり……』（コリント前書一三ノ一一）と言つて居ます。信仰の勇士の列傳を開いてみると、そこには、「信仰に由りてモーセは人と成りしとき……………罪のはかなき歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民ととも

に苦まんことを善しとし、キリストに因る謗はエジプトの財寶にまさる大なる富と思へり……」(ヘブル書一一ノ二四)と記されてあります。

□人生に於て信仰によりキリストを所有するに優れる財寶はまたとありません。凡てのものはあらばよし。なくとも可なりです。心の富はたゞキリストにかゝりてあるのみです。「愚なる者よ、今宵なんぢの靈魂とらるべし。然らば汝の備へたる物は、誰がものとなるべきぞ」(ルカ傳一二ノ二〇)で、たゞキリストのみが私共の靈魂の失せざる限り共にあるのです。

□然らばキリストを所有することが何故人生に於て最大無限の富であるかといへば、それは「キリストの測るべからざる富」(エペソ書三ノ八)即ち「神の奥義」「神の智慧」「神の智識」「凡てこれらの寶」が、がキリストに「藏れある」からであります(コロサイ書二ノ二、三)。

□それから「キリストを獲んが爲」とありますが、ラゲ譯には「キリストを贏け奉らん爲」とあります。この方がその意味を一層明らかにするやうです。

「律法による己が義ならで、唯キリストを信ずる信仰による義、すなはち信仰に基きて神より賜はる義を保ち……」とあるのは、結局、神と自己との關係をば、律法のやうな死文に照して見るのでなく、活けるキリストによつて見るのです。即ち在來の傳統的な形式的の信仰生活では、自己を正しい地位に置いて、そして神を正しく見ることが不可能であつてたとへばその眼が事物に對して朦朧として居たやうなものであるけれども、それがキリストを信ずる信仰によつて鮮明となり、それは恰も度の正しい眼鏡をかけたかのやうに、自己の地位もまた從て神も正しく見ることが可能やうになつたと言ふのです。これは多くの基督者が感謝もて經驗するところです。

□それから「キリストとその復活……」(同十)、これは歴史的の事實で、その事實を信ずることから、パウロの生活が實際強き力あるものとなつたことを語つて居るのです。死すべき者が死のない生活をなし

得るほど、強い力ある生活が他にありませうか。ヤコブ・ベーメは「時間が永遠のやうに、永遠が時間のやうに感じられる人、その人ぞあらゆる爭鬪から自由である」と言つて居ます。然し乍らその尊き自由も又その強い力も、キリストとその復活をも信ずることなしに私共にどうして得られませう。

□それは私共が聖い生活を送るの外に別に道はありません。そして聖い生活といふのは、「その死に效ひて彼の苦難にあづかる」(ピリピ書三ノ十) ことです。詳しく言へば、キリストのやうに從順に、キリストのやうな靈をもち、キリストのやうに苦難に處し、キリストのやうに死に、キリストのやうに榮光をあらはすことです。

□それはキリストが私共の全部になることです。「愛する者よ、汝らを試みんとて來れる火のごとき試煉を異なる事として怪しまず、反つてキリストの苦難に與れば、與るほど喜べ、なんぢら彼の榮光の顯れん時にも喜び樂しまん爲なり……」(ペテロ前書四ノ十二)とあります。つまりそれはこの意味です。

□パウロが斯の如くキリストの苦難にあづかるのを喜ぶ理由は、「如何にもして死人の中より甦へることを得んが爲なり」(ピリピ書三ノ二)で、それは彼が古より代々の殉教者や聖徒と共に甦へることを得たいために外ならないのです。言ひ換れば永遠の世界の光榮に與らんためです。即ちそれはさらに大なる光榮のために、いと小さき榮譽を棄て、自ら進んでキリストの苦難に與らうとすることです。

われおそるゝ時は汝によりたのまん
われ神に依りたのみたればおそるゝ
ことあらじ。肉體われに何をなし得
んや。　詩五六ノ三、四、

消息（一）

□岡崎小文氏、帝大宗教哲學科に聽講生として出席の傍ら本部にてミセスウッドと共に働かるゝ事となりたり。

□海老名夫人は京都青年會を、宇佐美夫人は神戸青年會を、ミセスメンデルソンは横濱青年會を、二宮夫人は東京青年會を代表して本部年會に出席せらる。

□ミススコットは四月中旬、河井總幹事は同下旬關西に出張せらる。

□三谷民子氏四月中旬京都に旅行せられし由

□ドクトルバー、米國第一の白痴兒童院々長なる同氏は渡來せられ、滯京中一日河井幹事の催されし茶話會に出席、青年會職員及びプリムマーに學ばれし方々に面會せられたり。

□土屋しげ子氏、大阪女子青年會幹事なる同氏は家事の都合により四月限り辭任せらる。

□ミセスネーサン、目下來朝中の米國婦人消費者組合の會長にして婦人問題研究の指導者なる同夫人は二十九日淺野總一郎氏宅の茶話會席上にて一場の講話をなせらる。

□ロッス博士夫妻、ユニオン大學教授なる同博士及夫人來朝中小石川なるホステスハウスに招待せり。

本部便り

□加州問題研究會。豫定の如く四月一、二日の兩日開催せられ、志立鐵次郎氏、植原悅二郎氏、吉野作造氏、河井道子氏の有益なる講演ありたり。今後も尚此問題の研究を續行する計畫なり。

□中央委員會。四月十六日開催。本部委員の他、東京青年會の二宮氏横濱青年會のミセスメンデルソン、京都の海老名氏、神戸の宇佐氏、其他二三の傍聽者あり、充實せる會合なりき。

□東京市内學生青年會役員懇談會。四月廿三日小石川ホステスハウスにて開會。出席者廿四名。英學塾、東京女子大學、東洋英和、女子學院の四校より代表者來會せられ、互に胸襟を開きて語り合ひ、利する所多き會合なりき。近々横濱に於ても同市學生青年會の爲同樣の集會を催す計畫なり。

□本部職員會。毎週月曜日午前十一時より十二時半迄開き、互に祈り考へ且計畫して働の充實を計りつゝあり。

東京女子青年會報告

酒井愛子

○教育部

一、新設諸組

(イ)午前の組二年（午前一年修了生）

(ロ)速記の組　高女卒業後英語を専門的に學びし者の程度、ミスレーシー受持、月水三時半—四時半

教科書　グレッグスショートハンドハンドブック

月謝　四圓。

(ハ)ピアノ、ヴイオリン　荒木幹枝姉受持

(ニ)體操科、火曜四時より五時、教師の組

同　五時より六時　初學科生の組

鈴木トミヱ

○商工部

一、四月七日商工部委員會あり、報告協議の後委員の研究調査報告に移る。大商店婦人店員の代表として三越の婦人店員の調査あり。年齡、俸給、教育、勤續、年限及不慮の場合に於る手當等に關し詳細なる報告ありたり。

一、四月十六日湧泉クラブ役員選擧。午後六時半より高田商會及同銀座販賣部、婦人店員の招待會を行ふ。

一、四月下旬には冲野岩三郎氏に依賴講演會を催す

○家庭部

坂本花代

一、四月十九日午後二時より三時半迄編物西洋裁縫の組との聯合で其製作品發表を兼ね茶話會を催す

一、四月廿三日午後六時より家庭親睦會を催す。今後度々催し多くの方々に斯る集會を紹介したき希望なり。次會は五月廿八日午後六時より。

一、四五月中に一戸先生の日本料理實習會を催したく五月の内に家庭會の文藝部の主催にて講演會開催の事に決定。

個人消息

□加藤高子姉　父君御病氣の爲歸鄕中の所過日歸京せらる。

□小堀芳子姉　去三月より東京病院に御入院中なりしが四月廿七日永眠せらる。

□伊東リウ子姉　去年九月より北里養生園に御入園中の所遂に十三日逝去せらる。

横濱女子青年會報告

○教育部。四月十一日始業式擧行。新入學生四十五名にして教室の不足を一層感じ、此學期より本會館三階寄宿舍の一部を用ふるの止なきに至りぬ。不完全なる教室にも拘らず、喜々として學び遊び語り合ひ且萬事に於て本會を助けんとせらるゝ姉妹方に感謝す。

○移民部。渡航の好時機なる昨今は當市二三の女學校生徒本會クラブ會員の援助により日々盛なり。

○クラブ。(一)夫人クラブ、四月十三日例會開催、ミセスフォレスタより家庭の理想につき實際的にして且有益なる御話あり、會員一同喜びの餘り次會には各自二三の友人を伴ふ事を約して散會す。

(二)有職婦人クラブ、四月廿二日の例會には男女共學の可否につき討論會を催すべく準備中なり。(三)ルイズクラブ、會員は此度具體的に各自の奉仕を移民部にそゝぎ、渡航婦人の爲紹介狀を認め、小冊子を配布する等に盡されつゝあり。優しき會員等の親切なる「サヨナラ」のひゞく時送らるゝ婦人達の中には涙にむせぶ者さへあり。

○新計畫。少くとも二件あり、一は當市女子教育に從事さるゝ方々の教師クラブ、二は當市支那女子の爲めのクラブ及び聖書の組なり、二者とも近き將來に於て實現さるべき見込なり。

○工場の働。工女三千人を有する程ヶ谷の富士紡績會社に一ヶ月二回出張して工女達の爲興味ある働を始めたり、音樂、短話等彼等には最も興ありげなり殊に遊戲はミスアレンの最愉快に親切なる指導を受けたまく晝飯の鐘をきゝながら食堂へ行くを拒むものさへあり。

○横濱婦人クラブ。外國婦人より成る同クラブは今後定日山手外人寄宿舍にて集會をする事と定め初夏六月にあたり庭園會を計畫中なり。

○遊泳。夏期中何所にか遊泳に適當なる所を得て會員のために備へ度く希望中なり。

神戸女子青年會報告 （バザーの記）

四月十六日と云へば神戸生田神社の祭禮日にて、雨の降る事に定つて居ります。此日に私等バザーを開きましたので、御天氣如何にと案じましたが、幸に長閑な春日和りを與へられましたことは、感謝の他はございません。當日九時頃迄には總ての用意も整ひ門前には國旗を立てゝ皆様を歡迎いたしましたお庭には英語の組の御孃様方の手によつて作られましたおすし、お汁粉の店、室内では瀨戸物店、燒き付け店、罐詰店、チヨコレート店、お二階では女子青年會々員よりの寄贈品、製作品本店、呉服店、糸店、木犀クラブのキヤラメルチヨコレート店、プリンセスクラブの文具店、さては教會の出張店、下駄褄皮、蜂蜜、キヤラメル、お砂糖、植木、お人形店等種々とり／＼に店が並べられました。

定刻には彼方此方の店で商賣が初まりました。まあ皆様のお上手なこと、商人そけ除けでございますお晝前には會館中ギツシリにて殊に飯食店の大繁昌御給仕の方々は天手古舞、併し皆様のお上手な御給仕振りには仲々感心いたしました。

此日の皆様の御樂しみの一つは、象が御土產を差上る事でした。如何な象かと好奇心にかられて入つていらつしやる、マア!!と第一に吃驚、後から大笑ひ、大人の方が恐れていらつしやるのは滑稽でしたお子供さんは大喜びで何度も／＼切符を買つては象の鼻からお土產を貰ふて居らつしやいました。所が中の象さん手が疲れて大弱り、併し大もてにて象も賣約ずみになりました。四時頃にはお汁粉も賣切れ方々のお店も品物が追々と少くなり、後からのお客様には御滿足を御與へする事が出來ませんでした。

七時頃皆々大滿足と喜びとを與へられて片付けに取かゝり、バザーの一日を終りました。會員諸姉の御多忙中にも係らず、會の爲貴重な時間と御體の御疲勞をも顧みず、御盡し下さいました事を感謝すると同時に、女子青年會を廣く紹介致す事の出來た事を深く喜んで居ります。（渡部君代氏報）

當日　來會者　七百名
純益　三百圓以上（目下淸算中）

廣島女學校青年會報告

北方に近く廣島城を控へて朝な夕なに勇ましい喇叭の響を耳にする悠長めいた地にて樂しく勉强する傍ら、特に心を一つにして主のお爲に奉仕する事の出來る貴い特權を心から感謝しつゝ花咲く希望の春を迎へました。去る月の下旬吾等は上級生會員諸姉數十名の門出を祝ひ、殘つた百名は其後を續いて進まふと決心致して居ります。新役員を左に御報告いたします。

會長　廣瀨濱子　書記　森　綾子
會計　栗原みつ子　集會及祈禱部長　藤田壽能
社交部長　田中利子　仕事部長　伴　いはを
音樂部長　田中榮子　圖書部長　佐々木房子

私達の最も切な望みの一つは校内の風紀を常に神聖に保ち學校と提携して生徒個人の神に對する心念を深すると共に若き時より奉仕的の生涯を送るといふ清い經驗を型る事です。それ故學課の暇を以て祈禱會談話會親睦會等を催し各自の經驗を分ち合ふ事にして居ります。會員一同日夜に女子青年會の發展を祈つて居ます。此小い團體の今後の働の爲に御祈り下さいませ。

横濱英和女學校青年會

會長　藤平たけ　副會長　藤崎とみ
會計　小池米子　書記　松岡千代枝
誘導部社交部　永野　幸　集會部　秋山美子
仕事部　柏木ムツ　販賣部　石原友惠

山梨英和女學校青年會

今年度の役員を改選致しましたから左に御報告申します。

會長　ハーパー先生　副會長　今村　先生
書記　野口千代子　會計　天野よし子
傳道部長　野口千代子　矯風部長　向山　先生

社交部長　堀内　靜枝　仕事部長　寺尾　先生
販賣部長　新海　光子

力足らず歩みのろい私共も「善を行ふにおくする勿れ」の當會の標語をます／＼實現いたしましてよき戰をたゝかひ御前に進み度く存じて居ります。

宮城女學校青年會

東北の地にも樂しい春が訪れて來ました。すべてが新しい命を得て春の光の中に生き／＼として居ります。私共新しく選ばれた委員もみな望と力とを得て元氣よく働いて居ります。殊にミス、ナウの御指導の下に新しく企てられましたクラブには小さい一年生の會員までが非常に興味をもつて働いて居ります。クラブは一二三年の小い者の爲に設けられた會でございまして專攻科の方が共指導をして下さいます。もう一つ今年度の新しい計畫は寄宿舍に圖書室を設けることでございます。西洋の先生や又生徒の有志から寄附して戴いた本をもとゝしてつくつたものでございます。比較的ひまのある安息日の午後をつまらない本を讀んだりして過したくないと思ひましたので。東北人のつねの事でございませうがほんとうに私共の會がソーシャルの方面にかけて居る事を心に感じます。内に外に共にのびる爲に最善をつくしたいと思つて居ります。今年度の新役員は

會長　増子わくり　副會長　岩間　よし
會計　畠山　千代　渡邊三千代　佐藤あい
書記　永島　和子　外交　岩間よし　今泉とく
仕事部　片桐さよ子　黑澤松代　海老名はる代
販賣部　猪股まき　佐藤かつ
圖書部　渡邊あや子　栗村みち
クラブ　中村菊代　土井てる

の方々でございます。前の會長の條さんがかげにあつていつも助けて下さいますので大變嬉しうございます。今週の金曜日には新入者の歡迎會をする事になつて居ります。本部の諸先生の上に御祝福豐ならんことを祈りつゝ。四、一九。

友の便り

○

先生の深き〳〵智慧を以て神の道より一歩もはづれないやうに御導き下さい。私は誘惑と怠慢とに打勝ちます。先生の御紹介でコンパース氏にも青年會主事益田氏にも御面會致しました。レーガン樣にも御目にかゝりました皆樣の心からの愛を私は感謝して居ります。信仰と愛には國境がありません。國と國との利害關係で戰爭をする程つまらない事はありません。先生が同志社の前で「世界から戰爭をなくしたい」と仰有いました。誰が何といつても之は眞理であります。日本の青年の爲世界的宗教及世界語を敎へ、四海同胞、各民族が各々特色をもち助け合ふ事によつて人類の進歩する事を知らして下さい。人類の爲に平和運動をして下さい。益に御健全を祈つて居ります。――大阪吉田氏より――

○

本部が岡崎、渡邊兩姉を御得になりました事を御悦び申上ます。本年の當會の總會は例年にない盛會で八十名の方が出席されましたバザーも愈々參ります。始めての事で恐ろしい樣な嬉しい樣な氣持で準備いたして居ります。切符の賣れ行きは誠によろしく、此分で此狹い家に千人近い方が來られましたら、如何しやうかと取越苦勞を致して居ります。私共のバザーと同時に本部の總會の開かれますのも面白く感じます。總會の上に御祝福豐ならん事を祈ります。―神戸大呑氏より―

○

昨日午後七十餘名の生徒と共に新學期を歩み出しました。希望と感謝とを以つて。倉田氏の「愛と認識との出發」御讀みになりましたか。私はまだ一部しか讀みませんが、涙が出る程でした。今迄讀みしものゝ中で最もうれしいものだと弟は申して居りました。五月號に何かとの御言葉、一時的に私の心にひゞく事を記したり、話したりいたす事を恐れます。

今朝よみました詩の一篇は獨を求めてかくれたがる私の心に強く響きました。

"Thou hast bid me leave the visions of the solitary life, bear my part in human labour take my share in human strife."

ヘンリーヴアンダイクの詩の一句でございます。

―横濱　上野氏より―

○

此頃は實に愉快に働いて居ます。皆々樣が一點の曇もなき樂しそうな顏して働いて居られるからでせう。祈りは實に不思議な事をさせます。不思議なる力と智とを與へます。如何なる困難も單に通り拔けられるといふのでなく、之により一層深く一層高く而も聖化された人になれるのであると確信するに至る事すらある迄に祈りは私を敎へてくれました。今日十一時の禮拜も實に愉快でした。自分が司會ではありましたが、少しの間館内の者が一緒に世もなく我もなく神を禮拜した時、會館が完全に神に於て聖化され、不完全ながらも又新に一同が心を一つにして再び神の御前に出る時まで、此祈心もて働き語り助け合ふことを思ひ愉快でした。今も愉快です。全く感謝です。

―横澤氏より―

○

音樂について私にはよくわかりませんが、今有名な聲樂家やピアニストや、そうした名のある人の音樂よりは、私には小學校の傍に立つてゐて、かすかにもれて來る小學生の合唱をきいた方がいかに「眞實」をおぼへさせられるかわかりません。技巧は到底、自然を

防ぐことは出來ないと思ひます。これと同じやうなことを宗敎についても考へてゐます。

—石田氏より—

會のさまざま

一、婦人矯風會大會。第二十九回大會は四月五日より七日迄靈南坂敎會にて開催せられ、全國より代員出席、盛んなる總會なりき。小崎千代子夫人、矢島揖子氏に代り會頭となられたり。

一、女學校聯合同窓會。四月三日女子高等師範學校講堂にて開かれ、杉村陽太郎氏、河井道子氏の講演ありたり。

一、日本基督敎同盟主催講演會。四月十二日夜青年會館にて開會、吉野作造氏、田川大吉郎氏、河井道子氏の講演ありき。

一、日本婦人平和協會。井上秀子、上代たの子、羽仁もと子氏其の他諸夫人の發起により て成れる同會は四月十八日打合せ會を開き、趣意書及び規約を制定せり。

× × × × × × × ×

雜誌代領收

（十年三月廿一日より 同 四月二十日まで）

田島 みし 九ノ十一—十ノ十
北川 米 九ノ十一—十ノ十
洒井 靜子 九ノ十一—十ノ十
大竹しづ子 九ノ九—十ノ八
北星女學校 九ノ一—十ノ十二
土倉橋千代 十ノ三—十一ノ二
木野 せい 十ノ三—十一ノ二
松坂 とき 十ノ一—十ノ六
ビグロー 十ノ三—十一ノ二
勝本 トク 九ノ十一—十ノ十
山中 寡美 十ノ三—十一ノ二
坂部 イチ 十ノ一—十ノ十二
鈴木 文 十ノ二—十一ノ四
横山 柳 九ノ十一—十ノ十
濱田 花 十ノ一—十ノ十二
芦野 きみ 九ノ十—十ノ九
小野 ケイ 十ノ三—十一ノ二
尾谷美都尾 十ノ四—十一ノ三
松田 直治 十ノ四
梅花女學校青年會 九ノ五—十ノ三
志立 タヨ 九ノ五—十ノ四
竹原 實惠 九ノ十二—十ノ十一
石崎 尾惠 十ノ一—十ノ十二
廣島女學校青年會 十ノ一—十ノ五
鷲見 千重 十ノ四—十一ノ三
石合 津留 九ノ十二—十ノ十一
河井 道子 三册代
毛利 英子 九ノ十一—十ノ十
小笠原初子 十ノ七—十一ノ六
金矢 てる 十ノ一—十ノ十二
横濱女子青年會 四月分
高橋 久與 九ノ十二—十ノ十一
青山女學院青年會 九ノ十二—十ノ十一
原 すが子 十ノ二—十一ノ一
手越 元 十ノ四—十一ノ三
久保田 幸 十ノ一—十ノ十二
十川 愛子 九ノ十一—十ノ十
秋山 淸子 九ノ十二—十ノ十一
傳道女學校青年會 九ノ五—十ノ四
共立女學校青年會 十ノ一、二、三月分
照內 マツ 十ノ二—十一ノ一
植野 幸子 十ノ三—十一ノ二
山本 靜江 九ノ九—十ノ八
船尾よし江 九ノ九—十ノ八
瀧野よしを 十ノ四
宮田 英子 十ノ四—十一ノ三

守田　長代　十ノ二―十一ノ一
田山　こと　九ノ十一―十ノ十
蕨　　麗子　九ノ九―十ノ十一
後藤　治子　九ノ十―十ノ九
東京女子青年會　十部代
原　するの　九ノ十二―十ノ十一
江口つる江　九ノ十二―十一ノ十一
大平みさを　九ノ九―十ノ八
小野寺靜子　九ノ六―十ノ五
和田　堅二　十ノ四―十一ノ三
笠島　春子　十ノ三―十二ノ二
相原　愛子　十ノ五―十一ノ四
横濱英和女學校　十ノ三
京野　錦　十ノ五―十一ノ四
新飯田ミツ　十ノ三―十一ノ二
山田　滋子　九ノ十―十ノ九
竹內よし江　十ノ一―十ノ十二
大谷　藤　九ノ十一―十ノ十
谷口　妙　九ノ十二―十ノ十一
鈴木　うた　九ノ十一―十ノ十
大泉　フミ　十ノ四―十一ノ三
大橋　鶴子　十ノ四―十一ノ三
富田　ふみ　十ノ一―十ノ十二
戶田　のぶ　九ノ十―十ノ九

修養會土地購入の爲

金六十五圓　プール女學校青年會
合計　五百二十七圓十二錢也

本部事業の爲

金一千圓　村井保固
金二十五圓　河井道子
金二圓　無名氏
金二十圓　宮城女學校青年會

中歐學生の爲

金二十四圓　松井、秋草、熊倉、西野
其他女子商業學校生徒有志者

維持會費

金三圓　山崎文子　十ノ一―十ノ十二
金三圓　木村直子　十ノ四―十一ノ三
金五圓　森まさの　九ノ十―十ノ九

雜誌御購讀者に御願申上げます

一住所御變更の際は御手數樣ながら御一報下され度候
一紹介用として本誌御入用の節は御遠慮なく申越され度し
一誌代は必ず前金にて御拂込下されたし

消息（二）

□東京女子青年會總會、五月七日開催。
□京都女子青年會學生大會、四月三十日同地にて開催、本部より河井幹事應援せらる。
□ミスシルス、神戶女子青年會を夏頃迄援助せらるゝ同氏は過日上京、日本婦人の働を研究中にて、自由學園、女子大學、赤十字社、女醫學校、學習院、矯風會、愛國婦人會等を參觀せられたり。
□松岡りサ氏、同志社出身の同氏は早稻田大學に聽講生として入學せらる。
□門倉藤子氏令息則之氏と稻垣靜江氏とは結婚式は二十六日神田女子青年會にて植村牧師司式の下に擧行せらる。
□正誤三輪貞子氏の受洗は誤報につき取消す

人を求む！

大連日本キリスト敎會附屬幼稚園保姆主任として經驗ある人を求む。

編輯室より

□追々夏らしくなりました。皆様お變りございませんか。時々頂戴する讀者の方々の御便りは本當に嬉しいものゝ一つでございます。本誌に就ての御意見御注意、御注文など伺ふことを喜んで居ります。どうか御忌憚なき御考へを御きかせ下さいませ。

□本部の事務所は追々賑かになりました。三階にはミセスウッド、岡崎小文氏、渡邊百合子氏、私が、それ〴〵の部屋に陣取つて居ります。二階はミススコット河井兩總幹事のお部屋、下は一般事務の取扱ひ所に當てられて居ります。時々お珍客もございます。先達も神戸女學院の青年會會長湯淺さくの氏他三人の方々がお見えになりました。此邊御通りがかりの節は何卒御立寄り下さい。

□今年の修養會は京都あたりになりますかもしれません。先達第一回の委員會を開き、時日場所講師標語などにつき下相談をいたしました六月號には、はつきりした御報告をする事が出來ると思ひます。修養會につき御感想をおもらし下さいませんか。出席者の御感を伺ふ事は委員にとつて最もよい參考でございます。今夏の會が最も善い修養會の一つとなりますやう、只今から御準備を御願ひいたします。

摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度。前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候
△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて且間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。
△振替、東京、貳參七貳參番

「女子青年界」定價及廣告料

定價郵税共

	內地	海外
一部	金十五錢	金拾七錢
一年前金	壹圓五十錢	金壹圓八拾錢

廣告料

一回掲載	
一行	金五拾錢
四分一頁	金五圓
半頁	九圓
全頁	金拾五圓

年極又は回數により割引有

大正十年四月廿八日印刷納本
大正十年五月一日發行

發行所 神田區錦町一丁目十六番地 日本基督教女子青年會 電話神田三六五二番 振替東京二三七二三番

發行兼編輯人 河井道子 神田區錦町一丁目十六番地

印刷人 前川吉太郎 芝區[illegible]山[illegible]泉町七番地

印刷所 三秀舍

connected with the new car line, active campaigning for subscriptions for the Land and Building Fund has been postponed till 1922.

A representative of the Hyogo Kencho has asked for the loan of the Association collection of posters and photographs on health subjects, for use in a Health Exhibit to be shown in Kobe during May, and in June in Himeji.

The Association rejoices in the coming of Mrs. A. G. Miller to organize a commercial department. Mrs. Miller is a graduate of Drexel Institute, Philadelphia, and has much experience in organizing and teaching commercial departments in High Schools in the United States. She is giving half-time to Kobe College and half-time to the Association. Billy Miller, aged ten, is also a welcome member of the Association family.

KYOTO

Mrs. Chapman's class in foreign sewing is proving most popular. Last week she hardly had time to breathe when forty women came. For the protection of Mrs. Chapman, as well as for the sake of the Oke San, we have decided to have two classes, one lasting from one to three and one from three to five. Mrs Maas conducts a class in tatting, crocheting and knitting on the same day.

The Doshisha Girl's School opened after the holidays with more than ninety students in the College Department. The Y.W.C.A. has been asked to take charge of all of the Religious Education in this Department. An outline of courses to be taught has been filed in the office and 90 students have enrolled in three classes.

Miss Best has begun her work in the Higher Department of the Dai Ichi Koto Jo Gakko and has caused great excitement among the girls as the first foreign teacher in forty years. This school had foreign teachers for the first ten years of its life but since then only Japanese people have taught English. Many girls are coming to the Association from this school and our student department (if such it can be called yet) is becoming rather unwieldy.

Among the foreign guests this month were Mrs. Denniston of the Pacific Coast Field and Mrs. Pinney of San Fransisco, for many years President of the Occidental Board of Foreign Missions.

Miss Kawai played in Kyoto one day last month. A day on Kiyomizu hill was good for all of us. Plans are being made now for her visit this month when she will make three addresses before the women of Kyoto. One emergency Committee meeting has been held to discuss plans.

The President of our Committee, Mrs. Ebina, went to Tokyo to the National Committee meeting to report the work of the Association of the past year and discuss plans for the future.

The regular club work is buzzing along and more and more girls are coming. When will the leaders appear?

standing of how the Christian ideal can make a home a happy place of mutual understanding and trust and love.

The Business Girls' Club is preparing a debate on Coeducation, and the girls are much interested in finding what they do think.

The Louise Club members have definitely offered their services to help Hibi San at the boats which carry so many young women to other countries. There are many ways in which their presence at the time of departure can mean much to the girls who are fearful of what lies ahead.

We are hoping to form a Teachers' Club and a club for Chinese girls very soon, and to plan for a week of real camping for a few girls, if it seems at all possible.

Our work at the Fuji Boseki Factory has proved very much wanted. There are between 2000 and 3000 girls living on the premises, and we are asked to come out twice a month on their holidays. There is a fine broad place where we play games, and a room that we can use in rainy weather, only then they have to be packed like sardines. Hibi San leads them beautifully in singing, and they love it, and then she tells a story, and then come the games, which the girls never want to stop.

The Yokohama Women's Club has decided to meet regularly at the Y.W.C.A. Residence, and are planning a garden party there in June. A new office secretary and interpreter has come in the person of Kawamura San, who is a graduate of Joshi Gakuin, and who is well able to take charge of the religious services for the servants. Several very interesting people have been guests at the Residence this month. A bath-house on the beach will be open to the girls when hot weather brings the desire for a swim.

The marriage question has brought us a problem in the person of a young man who demanded that he be allowed to see one of the dormitory girls, and insisted that she must marry him. It is much more complicated than it sounds, and for a while we did not know what to do, but the Japanese secretaries were very wise in the whole thing, and now a very fine young man is attending classes at the Y.M.C.A. and coming to tell the secretaries how sorry he is, and how grateful for all that they did for him.

Mrs. Mendelson went as the delegate from our board to the Annual meeting on April 16, in Tokyo.

KOBE

On Monday, March 28th, fifty-three girls of the graduating class of the Prefectural girls high school were entertained at the Y.W.C.A. One group was given a cooking demonstration by Miss Grace Stowe of Kobe College, while the others saw Miss Sills College book; later all joined in games and refreshments, listening to a brief explanation of the Y.W.C.A. purpose and activities.

The Annual Meeting of the Association was held on April Second. The chief speaker was Mr. Kimura, Social Service Head of the City, who gave a fine address summoning Association women to create spirit which shall be later embodied in City Institutions. Four new members of the Board were elected, including Miss Oda of the Congregational Bible School, recently returned from study in Oberlin. All accepted their elections and at a meeting on the 4th the board chose as officers the same women who have so faithfully served the organization thus far.

On Saturday, April 16, a bazaar will be held for the Building Fund of the Association. In accordance with the request of the Y.M.C.A., now engaged in a campaign for funds for its new building, made necessary by street alterations

Mitsukoshi girls have done. We are delighted at the splendid type of girls represented by this group and the others that have been coming to us lately. They promise well for the calibre of the future business women of Japan.

Miss Ferris has opened three new Gymnasium classes since vacation. A new beginner's class meets on Tuesday from five to six and a class for those who wish to fit themselves to be leaders in gymnasium and games meets at four o'clock on the same day. Many of the girls and some of the secretaries from the classes of longer standing have now entered this new leaders' class and are fitting themselves to help in the conduct of parties, smaller gymnasium groups, and clubs. On Friday evening a new cla s has been opened to business girls with a group of Mitsukoshi girls as a nucleus.

Miss Taka Kato has been called home by the serious illness of her father who has suffered a stroke of paralysis depriving him of the use the right side of his body and of all speech. Miss Kato will be absent for some time although we trust she will be able to return for our Annual Meeting in early May,—May 7th. The Tokyo staff and the membership miss Kato San more than can be expressed and extend to her their heartfelt sympathy and love during the sorrow and strain of these days. We have also been very anxious about Kohori San who has been to us such a loyal volunteer worker for more than a year. She has been in the hospital now for a month, seriously ill, and reports are not yet favorable. The friends that her radiant personality have won are hoping and praying for her recovery.

An Athletic Club has recently been formed with a membership of these who make up the Gymnasium classes at the Y. The girls will enjoy hikes and picnics this spring and through their club fellowship learn to know one another better.

English classes show a goodly increase with the opening of the spring term and to our joy the girls from these classes have been turniug out exceptionally well to our weekly Vesper service on Monday afternoons. We are working for regularity of attendance this term and for general interest in other Association activities.

On the afternoom of the 19th the sewing and knitting classes enjoyed a social tea and an exhibition of work accomplished last term. The Household Economics Department is now busy planning its next 'Family Party' which takes place on Saturday, April 23rd.

With unfurled flags and lighted candles the first Tokyo Girl Reserves were inititated on Tuesday evening April 19th. There were eight of them, with four or five more 'volunteers' at the meeting who will probably bring the number to an even dozen in another month. Tokyo is at present organizing most of its clubs along the line of the Girl Reserves and is working with the idea of club federation in view. All clubs are to be present at Annual meeting ready with songs and cheers. It promises to be a great day.

YOKOHAMA

The Educational Department opened the new term on April 11th, with a a short program. Forty-five new girls enrolled for work in the classes. We are much pressed for room for the night school, but have managed by using part of the dormitory.

The Married Women's Club have had a delightful and inspiring talk from Mrs. Forester, on "Ideals of Home Life." She speaks Japanese fluently, and gave these young women many things to talk and question about, and an under-

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN.

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume 18 May 1921 Number 5

NATIONAL

The Annual Meeting of the National Committee was held at the national house on Saturday, April 16. Officers for the year were elected, the Committee is very glad that Mrs. Ibuka will continue to act as chairman. For the first time each City Association was asked to send a representative to report on the work ef her Association. Mrs. Ebina came from Kyoto, Mrs. Usa from Kobe and Mrs. Mendelson from Yokohama. Lunch was served at twelve o'clock the business meeting was called at 1.30 and lasted through the afternoon and until 5.30, after which supper and then a social evening.

Miss Yuri Watanabe and Miss Kofumi Okazaki have recently come to the national staff, Miss Watanabe to be responsible for several important pieces of work, among them the meetings that are being held for a discussion and better understanding of international problems, the summer conference, and the work in connection with relief for students of Central Europe. Miss Okazaki is giving part time to the industrial work with Mrs. Wood, and is also taking lectures at the Imperial University.

The staff at national headquarters held its first weekly staff meeting on Wednesday, April 20th. The staff has grown to such an extent that the need for getting together to talk over general staff problems had become very apparent. These meetings will be used for study and devotion, and also as a clearing house for headquarters' plans.

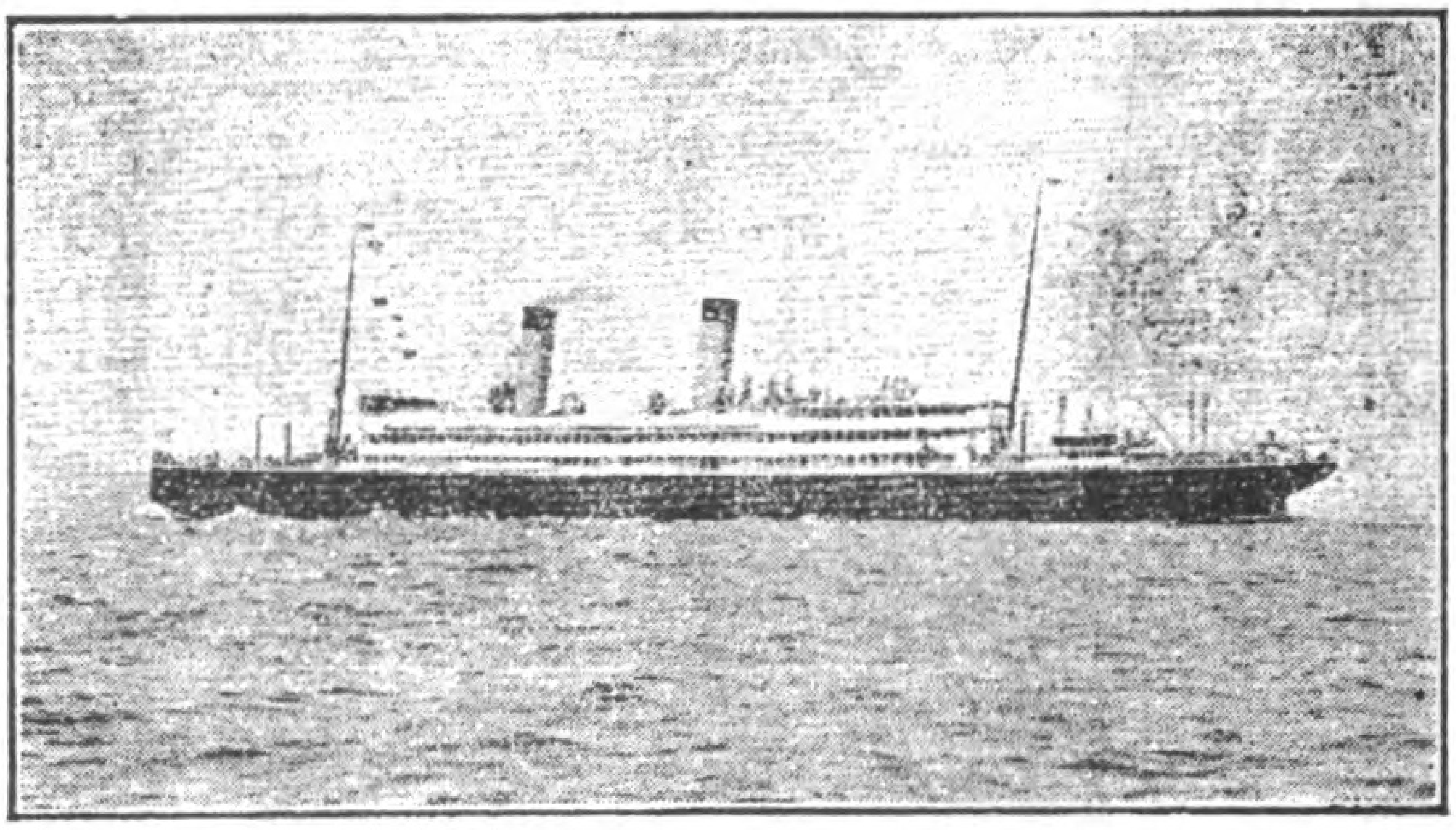
Miss Jane Scott went to Osaka, on the 18th of April to attend the meeting of the Executive Committee of the Federated of Missions, and to make her regular visits to the Associations in the south. Miss Kawai will go south on April 27th.

The National Committee, at a meeting on March 4th, discussed the request of the Pacific Coast Field Committee that meetings he held in Japan to consider the California problem. A Special Committee was appointed, with Mrs. Shidachi as chairman, to plan for such meetings. Two conferences have already been held, the first in March, at which Mr. Kamesaburo Aki, a Japanese physician who has lived in California for many years, gave a splendid talk. The second was a two day conference on April 1 and 2, at which the following were speakers: Mr. Shidachi, Professor Uehara, Dr. Yoshino and Miss Kawai.

TOKYO

The latest group of business girls to gather at the Y.W.C.A. in Kanda was a group of some forty girls from the Takata Shokai offices. They were entertained at supper followed by a program and games and a little talk on the Y.W.C.A. and what it has to offer them. We hope they will return to form a club, as the

東洋汽船株式會社



本社　東京市麴町區永樂町一丁目一番地（電話丸ノ内一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三番）

營業所　橫濱市山下町五番（電話本局四四〇〇、四四〇二、四四〇一、四四〇三、四四〇四番）

出張所（神戸市京町八三番。香港、キングス、ビルヂング。上海四川路ノース、チャイナ、インシユランス、ビルヂング。マニラ、チャコビルヂング。桑港、マーケット街六二五、マーチャンツ、ナショナル、バンク、ビルデング。紐育、ブロードウエイ、一六五。ホノルヽ、アレキサンダー、ヤング、ビルヂング。）

北米航路（桑港、布哇ホノルヽ、橫濱、神戸、長崎、上海、マニラ、及香港間）

本航路は太平洋航路中氣候温和、海上平穏なること第一にして船舶の巨大、設備の完全、待遇の懇切とに由り航海最も安全且つ愉快なり

天洋丸	三重螺旋ターピン機	排水量	二二、〇〇〇噸
地洋丸	同	同	二二、〇〇〇噸
コレア丸	双螺旋機	同	二〇、〇〇〇噸
サイベリヤ丸	同	同	二〇、〇〇〇噸
波斯丸	同	同	九、〇〇〇噸

南米航路（香港、門司、神戸、橫濱、布哇、桑港、羅府、墨國、巴奈馬、秘露及智利諸港間）

本航路は東洋南米間唯一の定期航路なり

安洋丸	排水量	一八、七〇〇噸
紀洋丸	同	一七、二〇〇噸
靜洋丸	同	一四、〇〇〇噸

各寄港地及各國樞要都市に代理店の設置あれば船室保留並に發着日割等は最寄に就て御問合せを乞ふ

女子青年界第拾八巻第五號（毎月一回一日發行）

大正十年四月廿六日印刷納本大正十年五月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可



一部定價二十錢